大阪府埋蔵文化財調査報告2003－4

# 高　槻　城　跡

## ―大阪府立槻の木高等学校音楽室建設に伴う―

２００４年３月

大阪府教育委員会

# 高　槻　城　跡

—大阪府立槻の木高等学校音楽室建設に伴う—

２００４年３月

大阪府教育委員会

A　金箔押軒平瓦

B　高槻焼関連遺物（集合写真）

C　高槻焼関連遺物（内窯・未製品）

D　高槻焼関連遺物（土鎮・ハマ・支柱）

E　高槻焼関連遺物（匣蓋）

F　高槻焼関連遺物（匣鉢）

G　高槻焼関連遺物（矢・煉瓦）

H　高槻焼関連遺物（本窯構築材）

# はじめに

高槻は大阪府の北部に位置しており高槻地域の歴史は摂津地域の中だけでなく日本歴史上でも重要な役割を果たしてきました。高槻市域には全国的にも著名な各時代の遺跡が多数存在し、その中には国指定史跡も複数あります。

今回報告いたします「高槻城跡」は芥川、檜尾川が形成した扇状地につくられた平城で、室町時代初期に入江氏が築城して以降、何人か城主が入れ替わりましたが、その中で特に有名なのがキリシタン大名の高山右近です。元和３年（1617）に入城した土岐定義は天守を造り、城門、石垣、土居など大改修を実施し、基本的にはこの時点で高槻城が近世城郭として整備されました。

このたび、大阪府立「槻の木高等学校」（府立島上高等学校と並存）が音楽室を建設することとなり建設予定地が高槻城本丸内の北東角部と推定されたため発掘調査を実施いたしました。

発掘調査の結果、調査地点が本丸の堀の中であることがわかり、堀の肩が従来の想定から20m近く西側によることが判明しました。遺物では高槻城で初めて金箔押瓦が出土しました。大阪府下において金箔押瓦が出土した遺跡は「大坂城跡」と「堺環濠都市遺跡」内の千利休屋敷跡隣接地の２例だけです。これは豊臣秀吉との関係で使用されたと考えられ、高槻城が豊臣秀吉に特に重要視された証拠となるものです。また、今回の発掘調査により本丸関係で初めて高槻焼（御庭焼）に関連する窯、窯道具、窯壁などの遺物が発見されました。これは幕末の有名な陶工・永楽保全が永井侯に招かれ、城内で築窯・作陶したとの記録と一致するものです。これらの成果は高槻城の歴史像をより豊かにしていくものと思われます。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました関係諸機関ならびに関係各位に感謝申し上げますとともに今後とも文化財保護行政に一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成16年３月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　向井正博

# 例　　言

1．　本書は大阪府立槻の木高等学校の音楽室建設に先立って実施した高槻市城内町２丁目所在、高槻城跡の発掘調査報告書である。

2．　調査に要した経費は大阪府教育委員会が全額負担した。

3．　現地調査は、大阪府教育委員会の依頼を受け文化財保護課調査第一グループ主査泉本知秀を担当者として平成15年６月26日から平成15年10月14日まで実施した。遺物整理作業は文化財保護課調査管理グループ技師、林　日佐子・小浜　成が担当し、平成16年３月すべての作業を終了した。

4．　本書の執筆は泉本知秀、西川寿勝、渡辺晴香が分担し、編集は泉本が担当した。なお、調査にあたっては大阪府立槻の木高等学校、同島上高等学校の関係各位、高槻市教育委員会の冨成哲也、高槻市立埋蔵文化財調査センターの森田克行、橋本久和、鐘ケ江一朗、西村恵祥、大阪城天守閣の中村博司、大阪市歴史博物館の佐藤　隆、(財)大阪市文化財協会の宮本佐知子、黒田慶一、京都国立博物館の尾野善裕、大手前大学の赤松和佳、岡　佳子、川口宏海、愛知県立惟信高等学校の佐藤公康、三井文庫の清水　実、(財)枚方市文化財研究調査会の下村節子、株式会社四門の鈴木祐子、(財)京都市埋蔵文化財研究所の能芝　勉、和泉市久保惣記念美術館の船木佳代子、新宿歴史博物館の水本和美の諸氏から多大のご指導、ご教示をいただいた。厚く感謝申し上げます。

5．　本書の写真測量は南紀航空株式会社に委託した。撮影フィルムは同社において保管している。遺物の写真撮影は(有)阿南写真工房に委託した。

6．　本報告書は300部作成し、一部あたりの単価は1,596円である。

# 凡　　例

1．　座標については世界測地系平面直角座標（第Ⅵ系)、方位については座標北、標高については東京湾平均海水面（Ｔ．Ｐ.)を基準とした。

# 目　　次

はじめに　例言　凡例　目次
第１章　歴史的環境……１～４
第２章　調査結果……５～８
第３章　出土遺物……９～22
第４章　まとめにかえて……23～24
図版　報告書抄録

# 挿図・表目次

図１　高槻城と周辺の諸城図……１
図２　分布図の高槻城位置図……２
図３　江戸時代高槻城跡比定図……３
図４　江戸時代高槻城絵図……４
図５　発掘調査区位置図……６
図６　発掘調査区平面図……７
図７　Ｂ区堀断面図……８
図８　近世出土遺物（１）……９
図９　近世出土遺物（２）……10
図10　高槻焼関連遺物（１）……12
表　陶磁器類対照表……11
図11　高槻焼関連遺物（２）……13
図12　高槻焼未製品……14
図13　金箔付着模式図……16
図14　軒平瓦拓影・断面図……17
図15　軒丸瓦拓影・断面図……18
図16　軒丸・道具瓦拓影・断面、弥生土器……19
図17　丸瓦拓影・断面図（１）……20
図18　丸瓦拓影・断面図（２）……21
図19　平瓦拓影・断面図……22

# 図　版　目　次

巻頭図版１　Ａ．金箔押軒平瓦
Ｂ．高槻焼関連遺物（集合写真）
巻頭図版２　Ｃ．高槻焼関連遺物（内窯・未製品）
Ｄ．高槻焼関連遺物
（土鎮・ハマ・支柱）
巻頭図版３　Ｅ．高槻焼関連遺物（匣蓋）
Ｆ．高槻焼関連遺物（匣鉢）
巻頭図版４　Ｇ．高槻焼関連遺物（矢・煉瓦）
Ｈ．高槻焼関連遺物（本窯構築材）
図版１　周辺航空写真（1970年代）
図版２　調査区全景（Ａ区、Ｂ区）
図版３　Ｂ区堀断面他
図版４　出土遺物（近世陶磁器）
図版５　出土遺物（軒平瓦）
図版６　出土遺物（軒丸瓦）
図版７　出土遺物（道具瓦）
図版８　出土遺物（丸瓦）

## 第１章　歴史的環境

高槻市は大阪府の北部に位置し、各時代にわたり著名な遺跡が存在する。郡家今城遺跡、津之江南遺跡、大塚遺跡、柱本遺跡、安満遺跡、天神山遺跡、紅茸山遺跡、芝谷遺跡、安満宮山古墳、弁天山古墳群、闘鶏山古墳、新池埴輪製作遺跡、土保山古墳、昼神車塚古墳、今城塚古墳、塚原古墳群、塚脇古墳群、阿武山古墳、嶋上郡衙跡、芥川廃寺、梶原寺跡、梶原瓦窯跡、石川年足墓、郡家川西遺跡、上田部遺跡等の原始・古代の遺跡はよく知られている。中世では宮田遺跡、富田寺内町などが有名である。中世につくられた芥川城には芥川氏が、高槻城には入江氏が在城していた。その後、細川氏により芥川山城がつくられた。芥川山城には後に三好長慶が入城してくる。永禄３年（1560）に長慶が河内の飯盛城へ移るとその子義興が入城し、権勢を振るうが永禄６年に義興、翌年に長慶が急逝し、北摂は三好三人衆の一人、三好長逸が支配した。永禄９年(1566)織田信長の芥川城攻撃で落城すると、高槻城の入江氏も降伏した。その後、高槻城には和田惟政が入城する。元亀２年（1571）白井河原の合戦で惟政が戦死し、その子惟長が跡を継いだが、元亀４年（1573）高山飛騨守・右近父子が乗っ取り、その翌年右近が四万石の高槻城主となる。

高山父子は熱心なキリスト教徒として有名である。右近の熱心な宗教活動はヨーロッパにまで聞こえていた。城内に教会堂を建て天正11年（1583）には消失した安土のセミナリオ（神学校）をもつくり、教理の研究と人材の育成までおこなっている。天正９年の時点で、領内の教会は20ケ所、信者は領内人口の60％以上にあたる18,000人にも達していたという。

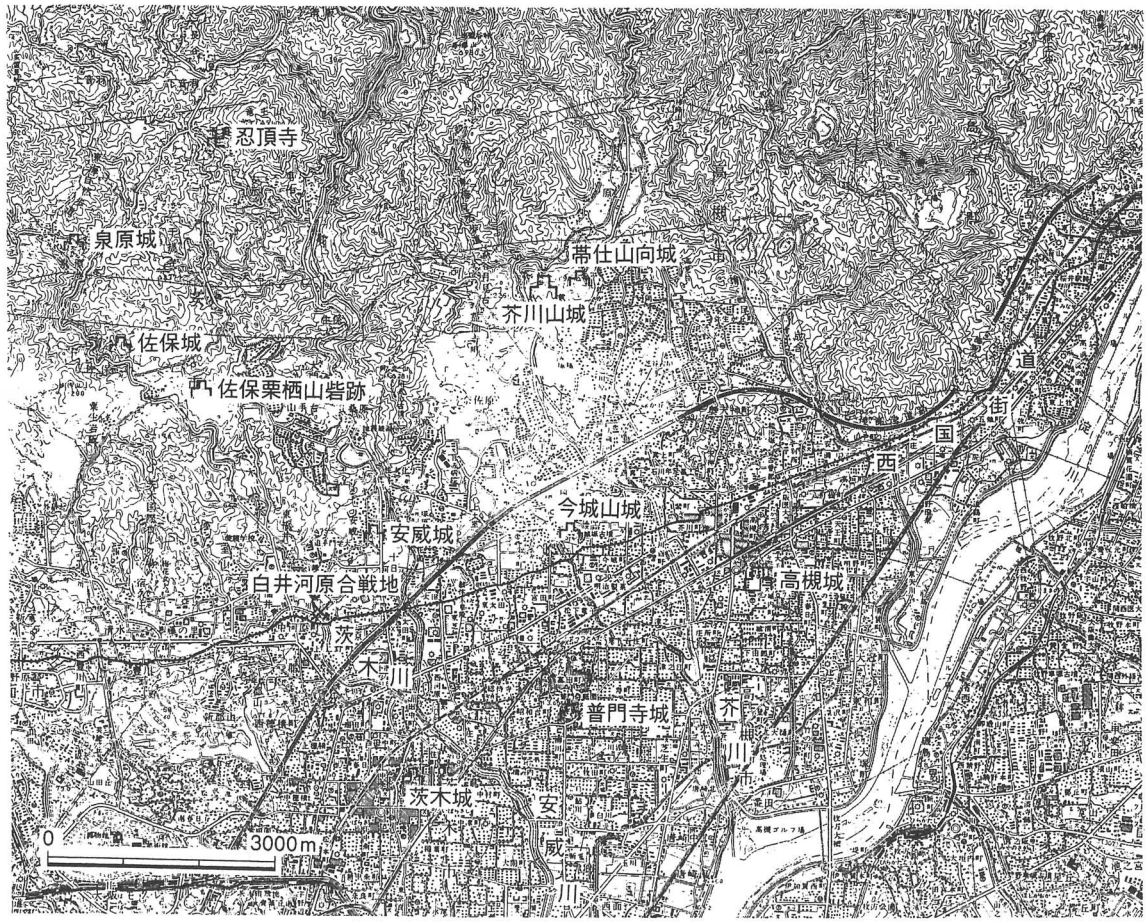



図１　高槻城と周辺の諸城図

天正10年（1582）の本能寺の変後、信長の後継者となった秀吉は天下一統を目指して大坂城築城を開始し、畿内中枢部の再編成に着手する。その一環として天正13年（1585）、高山右近は明石へ転封され、高槻は豊臣氏の直轄地となる。高槻城には羽柴秀勝が入り直後に亀山城へ移り、しばらく代官統治が続くが、文禄４年（1595）新庄直頼が城主となる。新庄氏は関ケ原の合戦で西軍に属したため、会津に配流され、高槻は徳川氏の直轄地となった。大坂冬の陣、夏の陣では高槻城は徳川方の補給基地として重要な役割を担った。

大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡すると、摂津・河内・和泉の大部分は徳川幕府の直轄地となり混乱が残る畿内鎮撫の重責を担うため、幕府は高槻城に有力な譜代大名を配置した。元和元年(1615)近江長浜から内藤信正が４万石で入城し幕府御用倉庫の「二万石蔵」を造営する。元和３年（1617）には下総から土岐定義が入部し本丸、二の丸を公儀修築し３層の天守閣をつくり、城下町が再編成され高槻城は近世城郭となる。この修築は短期間ではあるが大規模なものであった。ついで元和５年、三河から松平家信が入部し約16年間在城した。その後寛永13年（1636）播磨から岡部宣勝が着任し城地の西側に出丸を築いた。また寛永17年下総から松平康信が入部した。そして慶安２年（1649）山城から永井直清が三万六千石で入部し、城外の侍屋敷を拡張し城下の整備をおこなった。以後、永井氏は13代にわたり明治維新まで高槻城主をつとめた。

その後、明治７年（1874）京阪間の鉄道建設のため、高槻城は大部分が破却された。

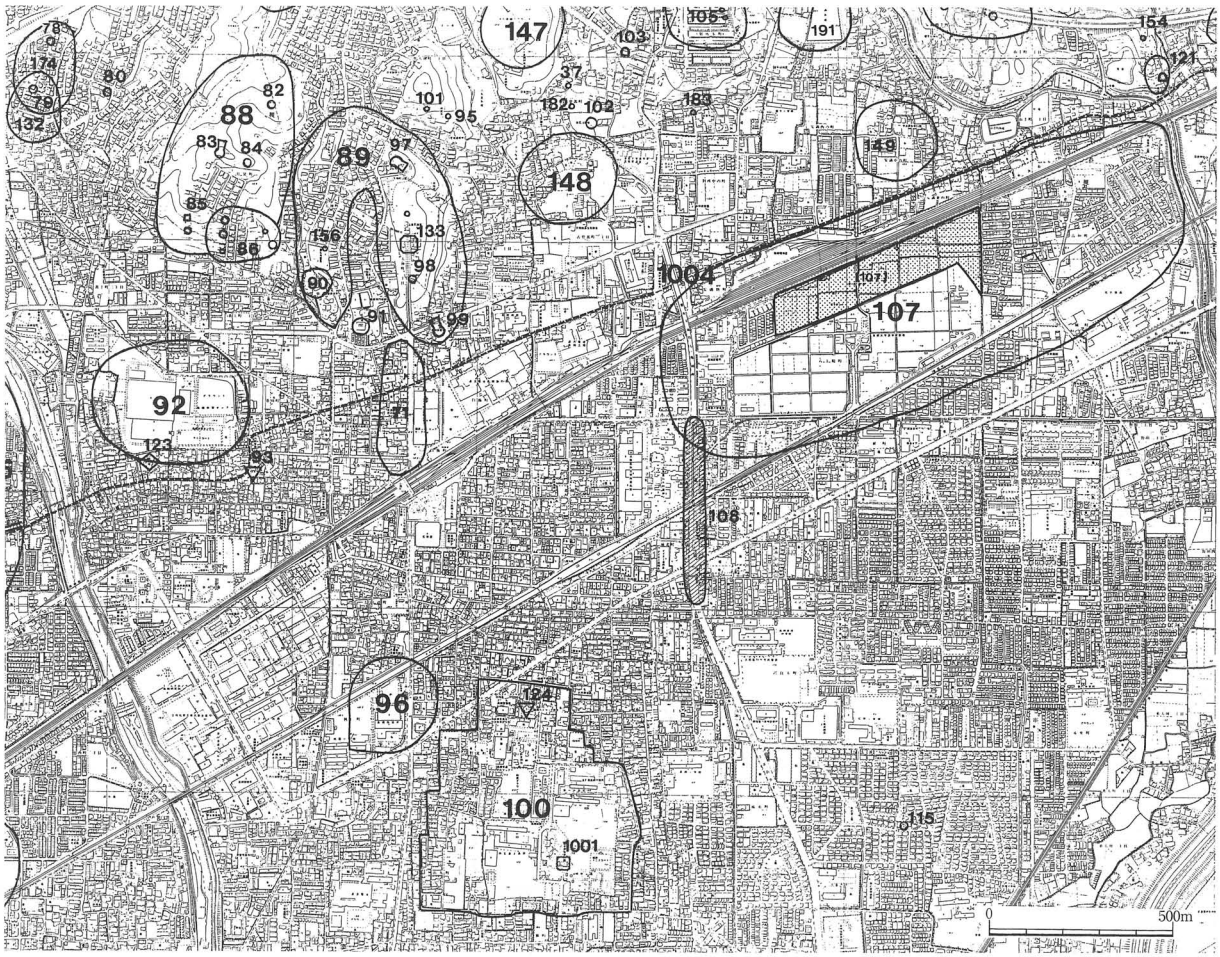



図２　分布図の高槻城位置図

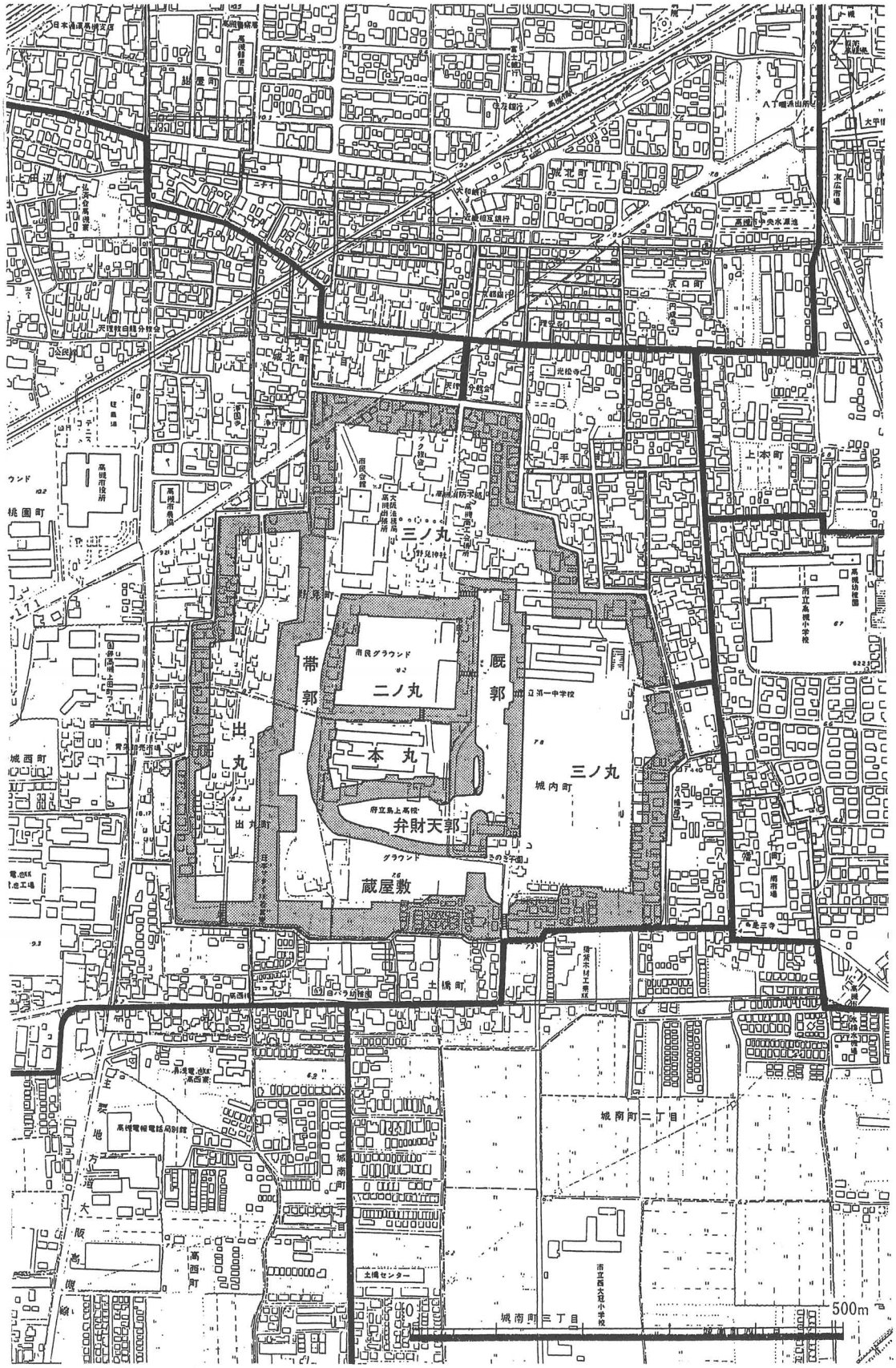



図３　江戸時代高槻城跡比定図（1971年作製地図）

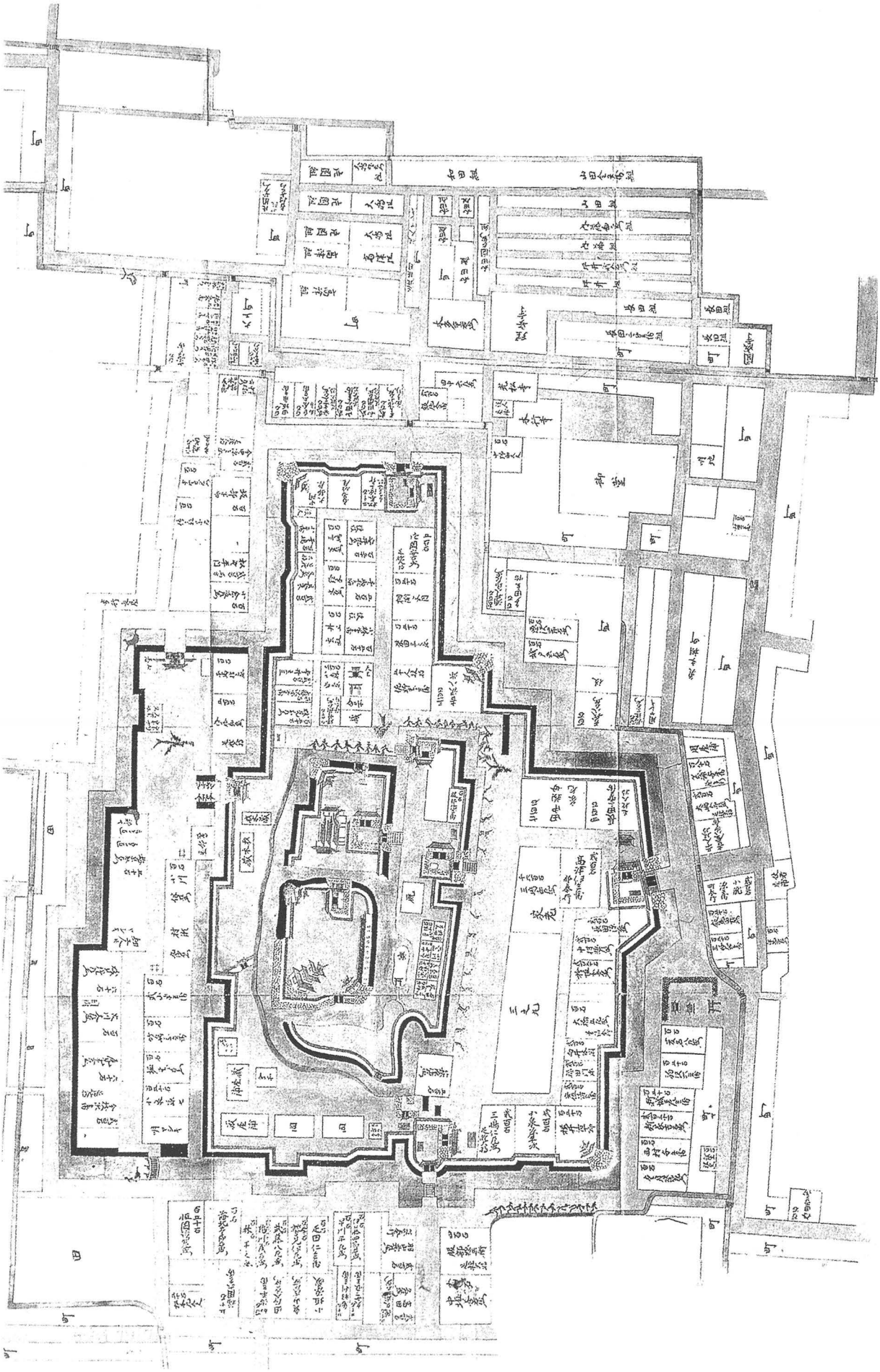


図４　江戸時代高槻城絵図

## 第２章　調査結果

高槻城本丸跡には現在、大阪府立島上高等学校、槻の木高等学校の校舎が建っている。二の丸、三の丸跡には城跡公園、市立中学校、市民会館、歴史民俗資料館、しろあと歴史館などの公共施設が多く占地している。この周辺の標高は約7.5mを測る。高槻城跡は昭和25年（1950）大阪府の史跡に指定された。高槻城跡の本格的発掘調査は1975年の島上高等学校体育館の建設工事にともなう調査（この報告書は1984年３月、高槻市教育委員会が発行、以下本書で市報告書と記述したものは同書をさすこととする。）を初例とし、以後、高槻市教育委員会が精力的に実施している。特に近年の調査例ではキリシタン墓地の発掘調査、三の丸堀跡の発掘調査等が脚光を浴びた。

江戸時代の高槻城は南北約618m、東西約563mの規模で平面は凸字形を呈する（図３）。堀を含めた面積は約300,000m²強に達し、観客席を含めた甲子園球場の約８倍にあたる。立地は高槻城の西方を南北に流れる芥川と東側を南北に流れる檜尾川にはさまれた扇状地上にあたる。城の北側を西国街道が通り、「京・大坂」間の中間に位置し、地理的にも重要な位置を占める。

今般、大阪府教育委員会が大阪府立槻の木高等学校（大阪府立島上高等学校と並存）敷地内北東角部に音楽室建設を計画したため、高槻城跡の発掘調査を実施することとなった。建築予定面積は288m²、鉄筋コンクリートの平屋建物で発掘調査は約380m²の面積を対象とした。従来の周辺の発掘調査の事例と高槻城絵図等の資料から建設予定地は本丸内の北東角で御土居部あたる場所と推定されたため試掘はしなかった。後世の削平も考慮して機械掘削30cm、人力掘削50cmと予想し、掘削等を請負工事として発注し、調査を実施した。土置きの関係から反転することとし、まず南半部（Ａ区）の発掘を開始した。水道管、ガス管部分を残して調査をすすめた。深さ50cmあたりで拳大の川原石がほぼ全面で検出された。当初は分からなかったが、小礫の群集は整地時に混入したもので遺構ではないことが判明した。深さ70cm～80cmまで掘り下げたがロート目薬のガラス瓶等が出土した近・現代の溝、土坑がみられた以外これといった遺構は検出されなかった。北半部（Ｂ区）には埋管などの障害物はなかったので１m以上掘り下げたが瓦片等の遺物は出土しても城に関連する遺構は全く存在しなかった。そこで念のため深さ５mまで試掘をすると唐津系陶器片１点（遺物番号18）、瓦小片１点が出土し、土層も青灰色粘土層とピート状土層の互層であったので堀跡と推定した。ただちに設計変更を行い、約90m²を対象とし素掘りの限界近くまで掘り下げた。その結果、堀の深さは５m前後で埋没過程等はⅠ～Ⅵ期に大別されることが判明した（図７）。深掘りした調査区の西端部は本丸東側に掘られた南北方向の堀の西側肩部斜面にあたる。Ⅰ期は堀ではなくて整地層と考えられる。南壁断面の最下層で長さ２m、径10cmの杭が認められた。杭はほぼ真ん中で東側に倒れていた（図７）。今回の調査面積が狭いためかⅠ～Ⅲ期の土層からは木片、葦などの植物遺体以外遺物は出土しなかった。Ⅳ期は細砂層を主体とした斜面堆積部がありその層から相当量の瓦が出土した。その中には軒丸瓦10点、軒平瓦が２点あり軒平瓦中の１点は金箔押瓦で金箔が僅かに残存していた。鳥衾、小菊瓦等も数点出土した。同じ層からは美濃系鉄釉皿破片１点が出土した以外他の陶磁器片は出土しなかった。また瓦片に

混じって弥生前期土器片（99）が１点出土した。このⅣ期の斜面堆積は元和３年（1617）から元和４年にかけての土岐定義の大改修の時期にあたると推定される（森田克行氏教示）。Ⅳ期の堀底の埋土はヘドロ状のピート層で、その土層内からは軒丸瓦（86）１点と葦などの植物遺体が出土しただけで陶磁器片、瓦破片はまったく出土しなかった。Ⅴ期の土層も同じくきれいなヘドロ状のピート層であり平瓦小片１～２点と試掘時に検出した唐津系陶器片（18）が出土した以外、他の遺物は出土しなかった。このⅤ期の堆積は17世紀後半～19世紀後半の城破却の時期までに属すると想定され、浚渫も考慮すれば多分その末期にあたるものと推定される。今回、遺物量が一番多く、しかも多種多様なものが出土したのはⅥ期と判定した青灰色粘土層からであった。この土層は西側、中央、東側の３ケ所でⅤ期のヘドロ層中に凹んでおり、真ん中は特に深く斜めに沈み込んでいた。ヘドロ状態の堀の中に本丸から瓦、高槻焼関連遺物、陶磁器、小礫、土砂等を一気に放り込んだと判断される様相であった。瓦破片、高槻焼関連遺物の出土量は多くコンテナ約20箱分出土した。これは明治７年（1873）の高槻城の破却工事に伴うものと推定される。その上層は瓦破片、陶磁器破片等を少量含む粘土質の整地層であった。この整地作業も同年代の可能性がたかい。ただし、明治42年（1909）から昭和20年（1945）まで軍隊（工兵第四聯隊中部第29部隊）の練兵場、兵舎が存在したのでその間の造成工事との関連があるかもしれない。今回調査地点の堀幅は絵図等から40m～50mと想定されているが堀の西肩部は従来の推定位置より20m前後西側に寄るものと推定される。

（泉本）

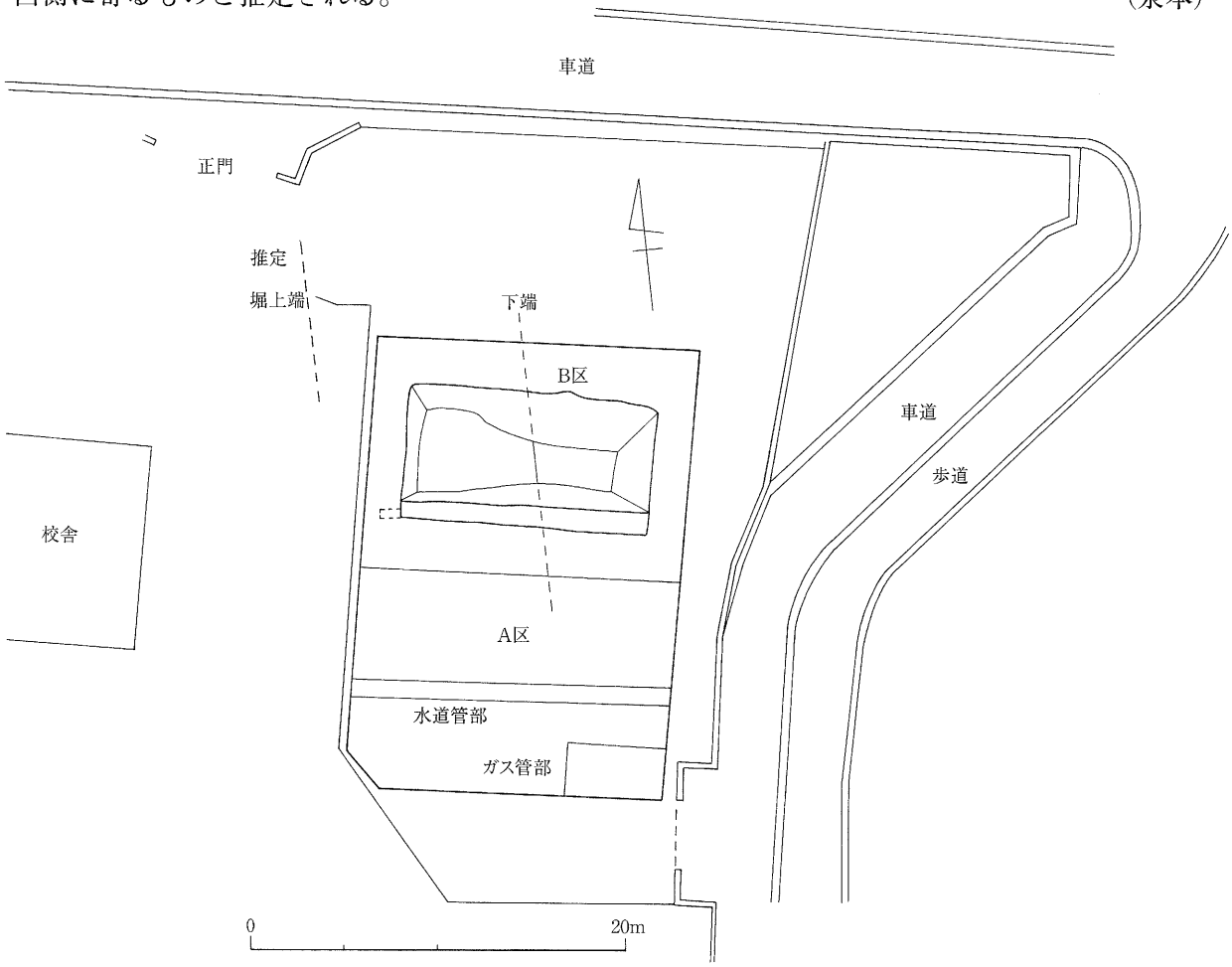



図５　発掘調査区位置図

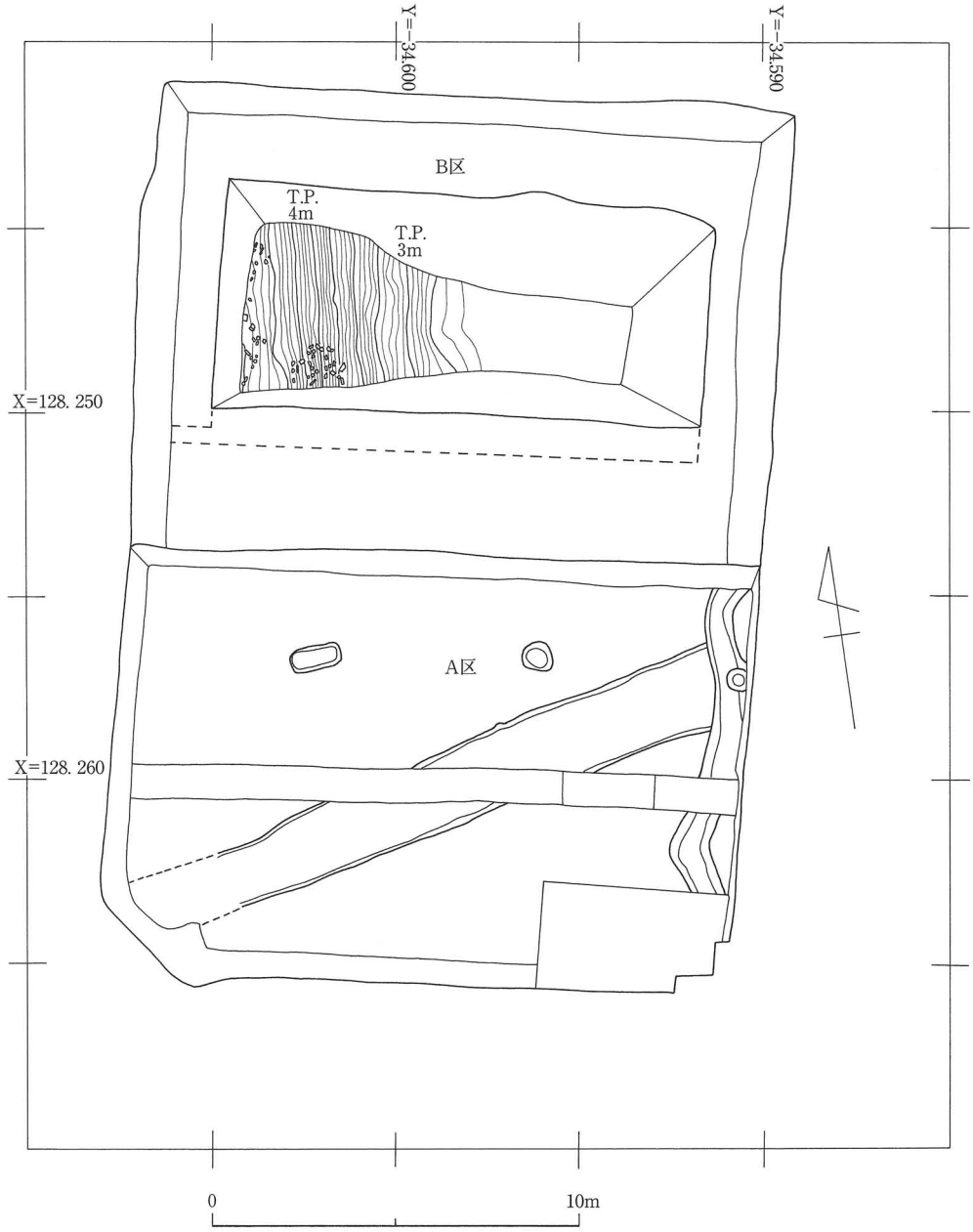
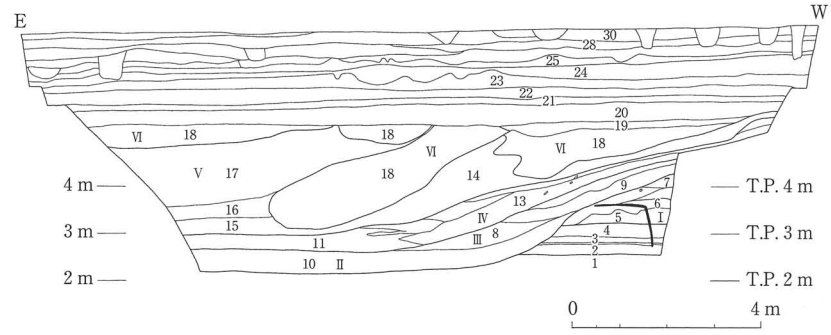
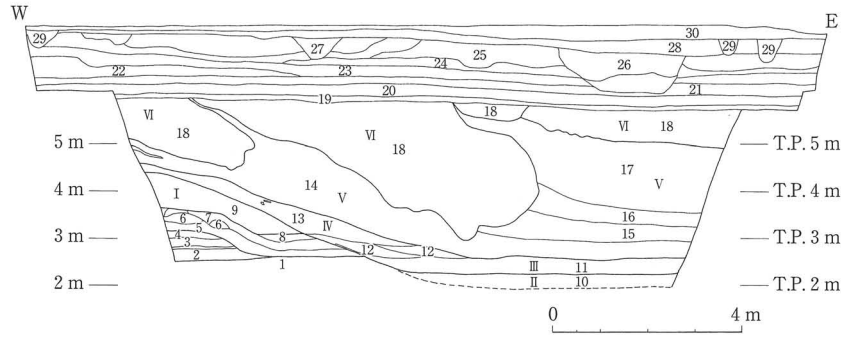



図６　発掘調査区平面図




| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 淡緑色粘土 | 11 | 黒色粘土塊混り青白色粘土 | 21 | 青灰色粘土 |
| 2 | 淡黒色粘土 | 12 | 青灰色砂質粘土 | 22 | 淡灰青色粘土 |
| 3 | 灰黒色粘土 | 13 | 灰青色砂質粘土（細砂層あり） | 23 | 淡茶色粘土 |
| 4 | 淡緑色粘土 | 14 | ピート | 24 | 淡茶褐色粘土 |
| 5 | 淡灰黒色粘土 | 15 | ピート | 25 | 淡茶黄色粘質土 |
| 6 | 明灰色粘土 | 16 | ピート | 26 | 木片混り褐色粘土（1945年以降） |
| 7 | 淡黄色ピート | 17 | ピート | 27 | 淡灰褐色土 |
| 8 | 青灰色砂質粘土 | 18 | 青灰色粘土（混礫） | 28 | 淡灰黄色粘質土 |
| 9 | 青白色粘土 | 19 | 淡青灰色粘土 | 29 | 淡茶褐色土 |
| 10 | 青白色粘土 | 20 | 青灰色粘土（ピート混り） | 30 | 表土 |

図７　Ｂ区堀断面図

## 第３章　出土遺物

堀の埋土中にはごく少量の弥生土器片、須恵器片等の他、中世から近世末の陶磁器・瓦などが含まれていた。これらに伴って窯道具類がみつかったことは、嘉永五年（1852）に永楽保全が高槻焼窯を築窯したことを裏付ける資料として、また、金箔押瓦が出土したことも特筆できる。

### ａ．陶磁器（図８～９・図版四）

肥前磁器は染付皿（２）～（６）、染付碗（７）～（13）、染付徳利（14）、色絵小杯、青磁香炉がある。いわゆる「くらわんか手」の製品（３）・（12）も含まれるが、薄手で良質の製品が多い。17世紀末～18世紀中頃の遺物が中心である。

肥前陶器は銅緑釉皿（15）、透明釉碗（16）、灰釉碗（17）、呉器手碗（18）・（19）、銅緑釉碗（20）、刷毛目文鉢（21）などがある。すべて17世紀代のものである。

京焼系陶器は根付（１）、鉄釉碗（22）、色絵碗（23）～（25）、灰釉腰折碗（26）、灰釉印花文碗（27）、灰釉碗（28）、刷毛目文筒形碗（29）、鉄釉土鍋（30）がある。根付（１）は獅子頭で、全体に灰釉をかける。裏面は離れ砂が残る。鉄釉碗（22）は内面に灰釉、外面に鉄釉がかけられる。灰釉印花文碗（27）は内面に印花を押して、灰釉をかける。貫入が細かく入り、胎土には砂粒を多く含む。見込みは３点目痕が残る。灰釉碗（28）は高台無釉で、内面は灰釉がかかる。少し焼き歪む。刷毛目文筒形碗（29）は、内外面ともに刷毛目を施し、呉須で文様を描く。

その他の陶器は丹波焼擂鉢（31）・明石焼擂鉢（32）などがある。

中世末期の高槻城築城頃の陶磁器として中国製青花皿、瀬戸天目茶碗・皿、備前焼擂鉢、土師質土器羽釜などもみつかっている。いずれも小片である。上層出土品の中には近代陶磁器も認められ、磁器碗・皿などがあり、ロート目薬のガラス製薬瓶もみつかっている。

### ｂ．窯関連遺物（図10～12・巻頭図版一～四）

匣鉢・匣蓋・土鎮・ハマなどの窯道具、内窯・内窯蓋・矢・窯壁などの窯を構成する遺物と未製品がある。

円錐土鎮（33）は、手ずくねで粗く仕上げられ、上端部に離れ砂が付着する。輪土鎮（34）の製品厚痕は径6.6cmを測る。胎土は精緻である。筒状土鎮（42）は上下端部に突起をもち、突起は一方が５本でもう一方が６本になる。瀬戸・美濃地方で使われている筒状土鎮と同類だろう。

撚り土（35）には大小さまざまなものが25点以上あり、匣鉢に付着したままののものもある。胎土は精緻なものと（35）、粗砂を多く含んだものがある。大きさと胎土は関連せず、輪土鎮か匣鉢の窯詰めに使用するものかは限定できない。中には鉄釉が付着しているものもある。

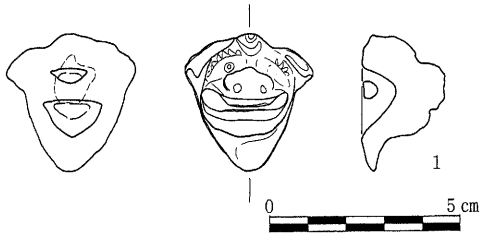


図８　近世出土遺物（１）

ハマ（39）は上面端部に厚く青磁釉が融着する。上面の製品厚痕は径6.2cmを測る。ハマ（40）は指頭圧によって丸く作りだし、裏面に砂が付着する。上面の製品厚痕は径7.2cmを測る。胎土は撚り土と同じで精緻な粘土である。

支柱（36）は粘土紐を粗くまとめたもので、不定形であ

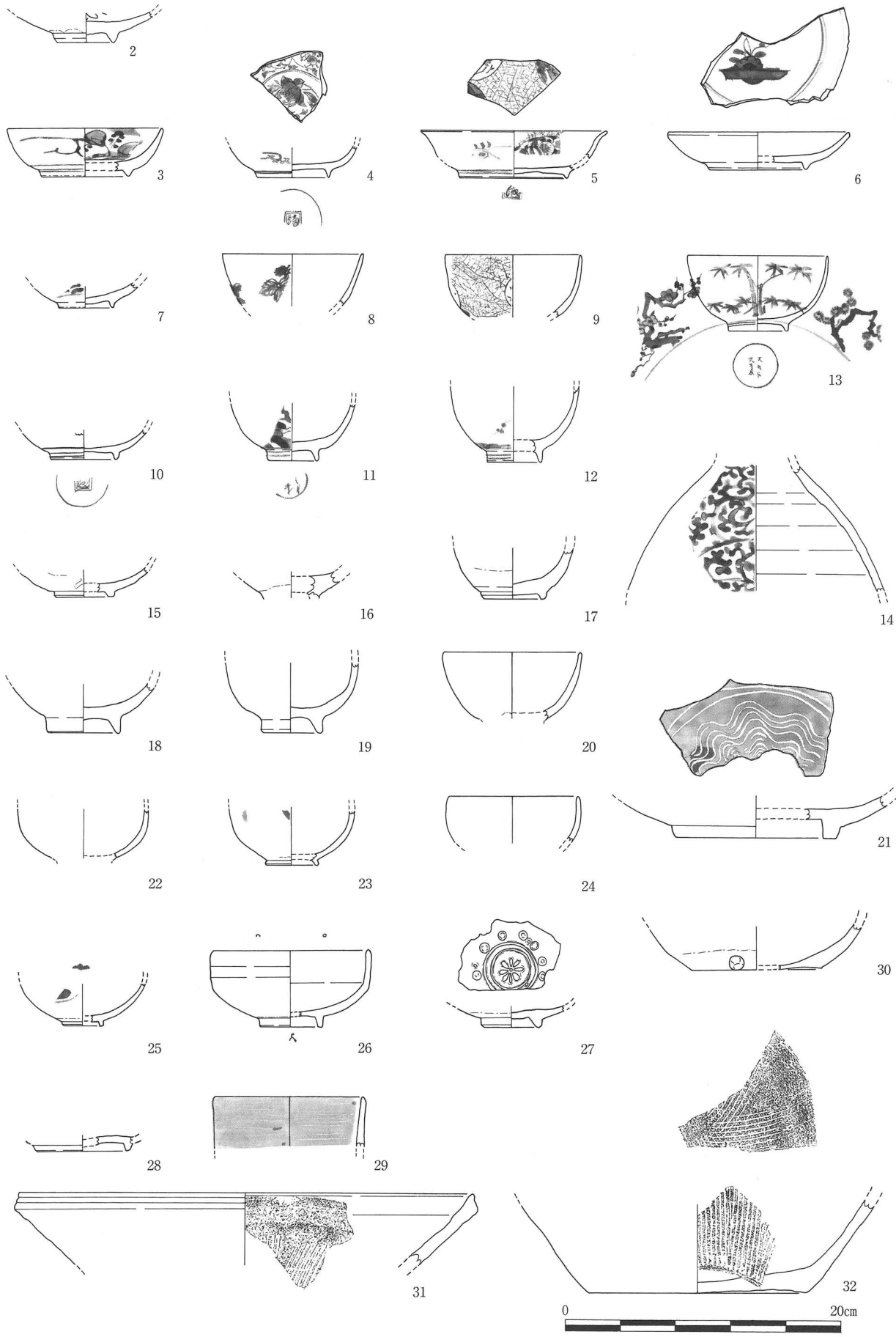

2
3
4
5
6
7
8
9
13
10
11
12
15
16
17
14
18
19
20
22
23
24
21
25
26
27
30
28
29
31
32
0
20cm

図９　近世出土遺物（２）

| 遺物番号 | 図版番号 | 実測番号 | 器　　種 | 口径・縦 | 器高・横 | 底径・厚さ | 残　存 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 4 | 21 | 京焼系灰釉根付 | 3.6 | 3.4 | 最大厚2.2 | 完形 |
| 2 | 4 | 27 | 肥前磁器染付皿 | － | 2.2～ | 4.2 | 1／2以下 |
| 3 | 4 | 43 | 肥前磁器染付皿 | 11.2 | 3.5 | 6.3 | 1／2以下 |
| 4 | 4 | 28 | 肥前磁器染付皿 | － | 2.4～ | 5.2 | 1／2以下 |
| 5 | 4 | 33・34 | 肥前磁器染付皿 | 13.4 | － | － | 1／2以下 |
| 6 | 4 | 26 | 肥前磁器染付皿 | 13.0 | 2.7 | 6.8 | 1／2以下 |
| 7 | 4 | 40 | 肥前磁器染付碗 | － | 1.8～ | 4.0 | 1／2以下 |
| 8 | 4 | 38 | 肥前磁器染付碗 | 10.1 | 3.8～ | － | 1／2以下 |
| 9 | 4 | 32 | 肥前磁器染付碗 | 9.8 | 4.5～ | － | 1／2以下 |
| 10 | 4 | 29 | 肥前磁器染付碗 | － | 2.1～ | 4.8 | 1／2以下 |
| 11 | 4 | 44 | 肥前磁器染付碗 | － | 4.1～ | 3.5 | 1／2以下 |
| 12 | 4 | 41 | 肥前磁器染付碗 | － | 5.5 | 3.8 | 1／2以下 |
| 13 | 4 | 31 | 肥前磁器染付碗 | 10.1 | 5.5 | 4.3 | ほぼ完形 |
| 14 | 4 | 36 | 肥前磁器染付徳利 | － | 9.1～ | － | 1／2以下 |
| 15 | 4 | 6 | 唐津系陶器銅緑釉皿 | － | 1.9～ | 4.2 | 1／2以下 |
| 16 | 4 | 45 | 唐津系陶器透明釉碗 | － | 2.0～ | － | 1／2以下 |
| 17 | 4 | 4 | 唐津系陶器灰釉碗 | － | 3.7～ | 4.4 | 1／2以下 |
| 18 | 4 | 46 | 唐津系陶器呉器手碗 | － | 3.6～ | 5.0 | 高台完形 |
| 19 | 4 | 13 | 唐津系陶器呉器手碗 | － | 5.0～ | 4.5 | 高台完形 |
| 20 | 4 | 5 | 唐津系陶器銅緑釉碗 | 9.8 | 4.8～ | － | 1／2以下 |
| 21 | 4 | 7 | 唐津系陶器刷毛目鉢 | － | 3.1～ | 11.4 | 1／2以下 |
| 22 | 4 | 3 | 京焼系灰釉碗 | － | 3.5～ | － | 1／2以下 |
| 23 | 4 | 2 | 京焼系色絵碗 | － | 4.3～ | 3.6 | 1／2以下 |
| 24 | 4 | 77 | 京焼系色絵碗 | － | － | － | 1／2以下 |
| 25 | 4 | 14 | 京焼系色絵碗 | － | 3.0～ | 3.8 | 1／2以下 |
| 26 | 4 | 1 | 京焼系灰釉碗 | 11.0 | 5.5 | 4.4 | 1／2 |
| 27 | 4 | 17 | 京焼系灰釉印花文碗 | － | 1.4～ | 4.0 | 高台完形 |
| 28 | 4 | 15 | 京焼系灰釉碗 | 9.2 | 3.3～ | － | 1／2以下 |
| 29 | 4 | 16 | 京焼系刷毛目文碗 | 10.6 | 3.7～ | － | 1／2以下 |
| 30 | 4 | 4 | 京焼系鉄釉土鍋 | － | 3.2～ | 9.4 | 1／2以下 |
| 31 | 4 | 11 | 丹波焼擂鉢 | 32.8 | 5.2～ | － | 1／2以下 |
| 32 | 4 | 39 | 明石焼擂鉢 | － | 6.3～ | 15.6 | 1／2以下 |
| 33 | D | 48 | 円錐土鎮 | － | 2.8～ | － | 3／4 |
| 34 | D | 81 | 輪土鎮 | 直径7.0 | － | － | 1／2 |
| 35 | D | 79 | 撚り土 | － | － | 1.9 | 1／2以下 |
| 36 | D | 52 | 支柱 | － | 8.0 | 最大厚5.5 | 完形 |
| 37 | D | 65 | 不明窯道具 | 4.3～ | 6.0～ | 0.3 | 1／2以下 |
| 38 | D | 67 | 不明窯道具 | 5.0～ | 5.8～ | 0.4 | 1／2以下 |
| 39 | D | 47 | ハマ | 直径7.7 | 2.3 | － | 完形 |
| 40 | D | 49 | ハマ | 直径11.6 | 1.2 | － | 1／2以下 |
| 41 | － | 63 | 不明窯道具 | － | 2.9 | － | 1／2以下 |
| 42 | D | 59 | 筒状土鎮 | － | 7.6 | － | 3／4 |
| 43 | G | 62 | 煉瓦？ | 10.0～ | 6.1 | 最大厚3.7 | 1／2 |
| 44 | G | 55 | 矢 | 15.2～ | 最大横6.3 | 最大厚4.1 | 1／2 |
| 45 | C | 35 | 内窯蓋 | － | 4.2 | 径19 | 1／4 |
| 46 | C | 64 | 内窯 | 20.2 | 4.1～ | － | 底部片 |
| 47 | H | 61 | 窯体（トンバイ） | 14.8～ | 8.5～ | 9.1～ | 1／3 |
| 48 | H | 60 | 窯体（トンバイ） | 21.9 | 8.7～ | 16.3 | 1／2 |
| 49 | E | 51 | 匣蓋 | 18.5 | 14.1～ | 3.8 | 1／2 |
| 50 | E | 50 | 匣蓋 | 13.7 | 12.7～ | 1.4 | 1／2 |
| 51 | E | 53 | 匣蓋 | 23.0 | 13.5～ | 2.3 | 1／2 |
| 52 | E | 57 | 匣蓋 | 8.4～ | 10.0～ | 2.0 | 1／2以下 |
| 53 | E | 58 | 不明窯道具 | 12.1～ | 11.1～ | 1.6 | 1／2以下 |
| 54 | F | 73 | 匣鉢 | － | 10.0～ | 19.2 | 1／2以下 |
| 55 | F | 70 | 匣鉢 | 18.6 | 14.9～ | － | 1／2以下 |
| 56 | F | 68 | 匣鉢 | 19.2 | 5.7 | 17.4 | 1／2以下 |
| 57 | F | 69 | 匣鉢 | 23.9 | 6.8 | 24.0 | 1／2以下 |
| 58 | F | 80 | 匣鉢 | 25.8 | 7.2 | 24.8 | 1／2以下 |
| 59 | C | 18 | 未製品 | － | － | 9.6 | 1／2以下 |
| 60 | C | 20 | 未製品 | 体部径13.2 | － | － | 1／2以下 |
| 61 | C | 19 | 未製品 | － | － | 15.7 | 1／2以下 |

表　陶磁器類対照表

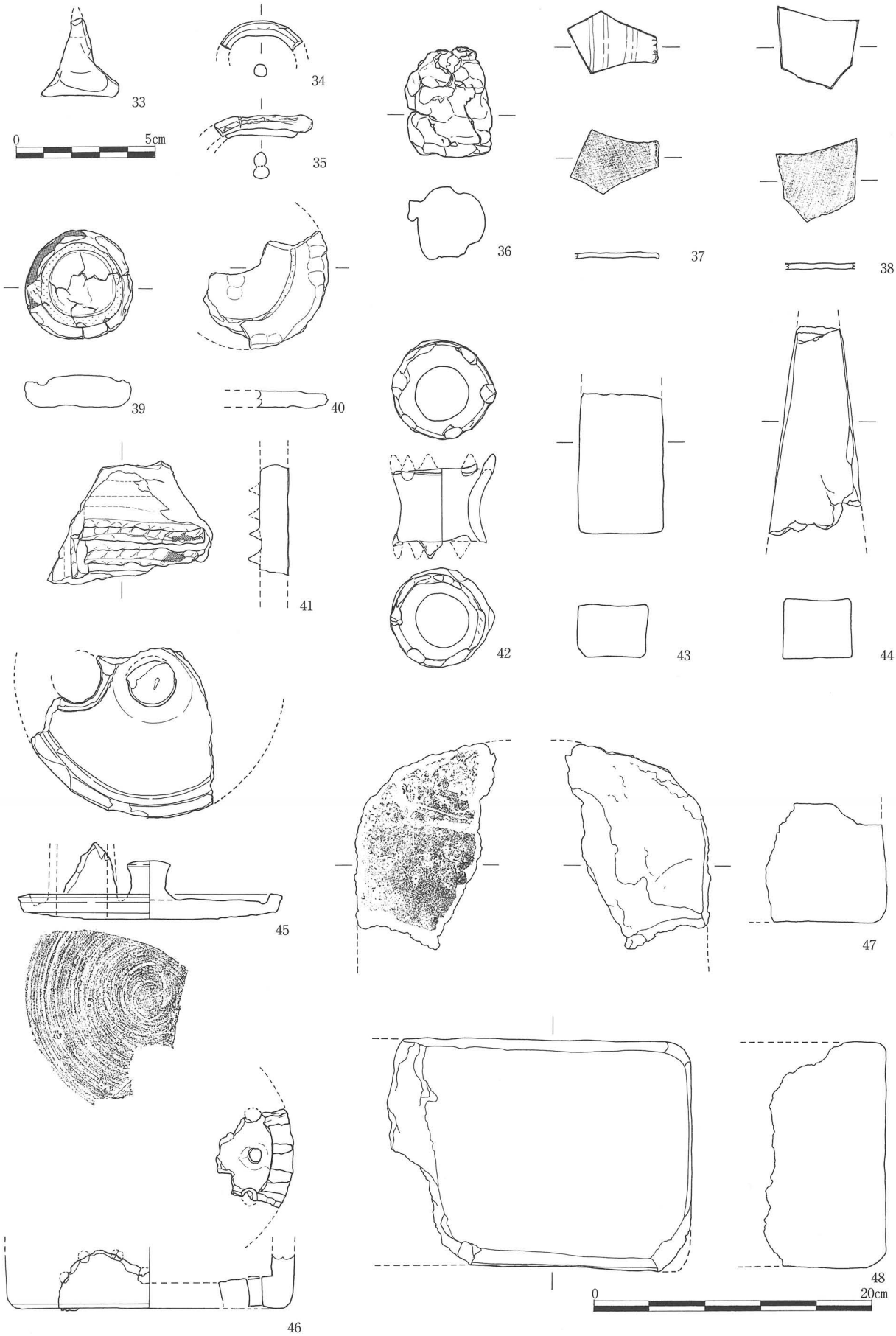



図10　高槻焼関連遺物（1）

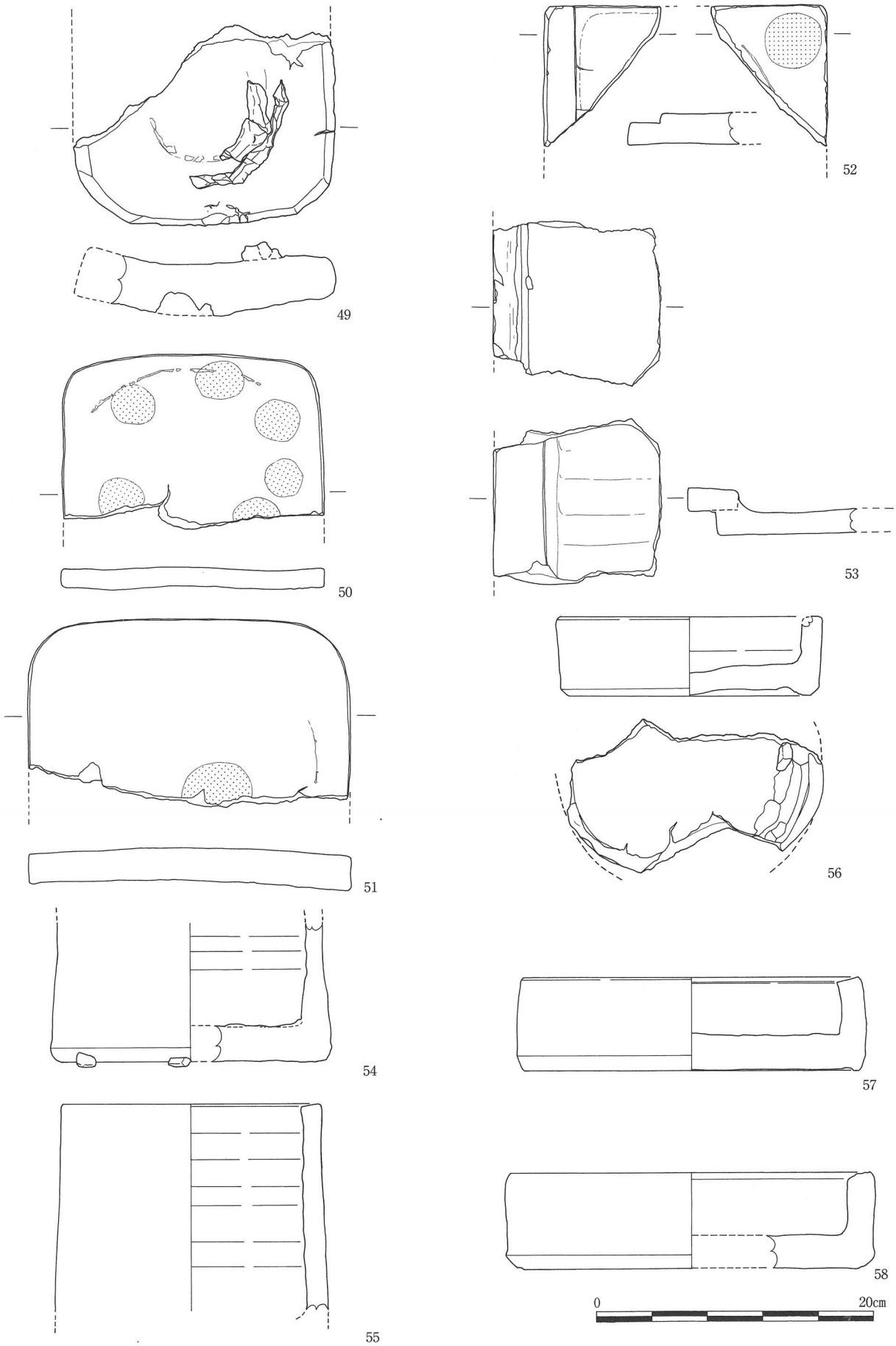



図11　高槻焼関連遺物（２）

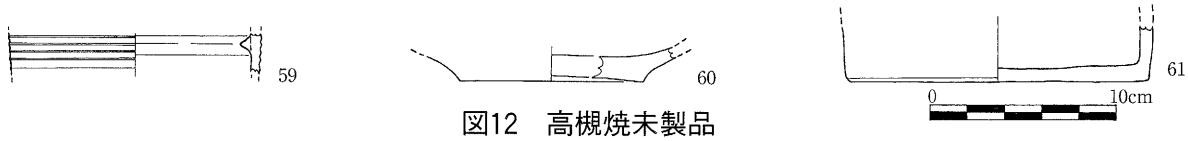



図12　高槻焼未製品

る。表面は赤褐色を呈する。

不明板状品（37）・（38）は厚さ0.3～0.4cmの薄い粘土板である。素焼きで、胎土は白く精緻である。片面には布目痕があり、もう片面は素地のままである。一部に端部が残り、未調整であるため未製品とは考えにくい。

不明窯道具（41）は粘土板の片面に粘土紐を山状に貼り付ける。山は等間隔に平行に貼り付けられるが、途中で直角に方向を変える。山には褐色と緑色の釉薬が滴り落ちる。山は粘土板より精緻な胎土である。また、もう片面には砂が層状に付着する。使用方法は不明である。

矢（44）は両端部を欠損し、胎土はやや粗く、礫が混じる。

煉瓦（43）は短冊形で、胎土や断面形は矢（44）と同じである。

内窯（46）は径が20.2cmで、底面と側面に穿孔がある。底面には粘土塊が付着しており、脚が取り付いたようだ。胎土は粗く、砂粒を多く含む。内外面ともによく焼け締まり、底面には灰が垂れる。内窯蓋（45）は円形で、中心につまみがある。径19.0cmを測る。裏面には右回転糸切痕があり、透明釉がかかる。つまみ横には円筒形の穴があり、色見孔だろう。口縁部を中心に煤けており、軟質である。胎土はやや粗く、砂粒はあまり含まず、内窯（45）とは異なる。

窯の構築材（47）は側面が曲面をなし、表面はカーブを描き、ガラス化している。底面には布目痕が残り、熱を受けていない。窯の構築材（48）は肥前地方ではトンバイとよばれる形状で、全面が煤けて瓦質である。他の同類品は表面が良く焼けている。その他に、本焼窯の一部と考えられる、ガラス化した面をもつ窯壁片（巻頭図版四）もみつかっている。

匣鉢（54）～（58）はいずれもロクロ成形で、すべて円筒形で平底である。底部外面のたちあがりは面取りするものが多い。口径は15cm前後、20cm前後（55）・（56）、25cm前後（57）・（58）に大別できる。器高を計測できる個体は6cm前後のもの（56）～（57）しかない。それ以上の高さのものは最大15cm以上を測るものがある。胎土は粗砂を多量に含むものと、あまり含まないものがある。大小による胎土の違いはみられない。また、匣蓋についた撚り土が二重になるもの、匣鉢内に輪土鎮痕が二重のものが観察できることから、最低2回の焼成に使用されていたことがわかる。匣蓋（52）は方形の粘土板で、一辺を削り出して段を設ける。輪土鎮の痕が明瞭に残るもの（50）・（51）、撚り土が二重に残るもの（49）がある。円形の匣蓋はみつかっていない。

粘土板の端部に段を設ける板状品（53）は匣蓋とは形態が異なり、一辺に幅3.5cmの粘土板を貼り付けて段を作る。表裏面ともに赤褐色を呈する。同様の形態で、同色調に焼けたものはほかにも数点みつかっており、中には熱で変形しているものもある。

未製品（59）～（61）は素焼きで、釉薬はかけられていない。水指の体部小片（59）は内面に粘土紐を貼り付け、蓋受け状にする。外面は波状に削る。体部径13.2cmを測る。水指底部（60）

は型作り成形で、回転ナデ調整を施す。平底で径9.6cmを測る。水指底部（61）はロクロ成形で、底部際を面取りする。底部径15.7cmを測り、体部は筒形に直立する。

今回みつかった窯・窯道具は大小100点以上を数える。大半は破片で、窯も形状を復原できないものの、内窯・外窯・窯道具・未製品がそろって発見されたことより、調査区のすぐ近くに窯が築かれていたことを示す。また、これらが廃棄されていた本丸の堀は、廃藩置県のころに埋め立てられたことが知られている。窯道具類の廃棄時期も堀の埋め立て時期までと推定でき、文献に記された永楽保全の築窯を裏付けるものとなった。とくに、窯壁（巻頭図版四）や、窯構築材（47・48など）を伴っていることは本焼窯があったことを示し、匣鉢の出土にも対応する。確実な素焼き窯、上絵付け窯の窯体はみつからなかったが、間仕切りとなる矢（44）と表面が熱でガラス化していない小型の煉瓦（43）がみつかっており、窯の存在を示唆する。そして、内窯（46）と内窯蓋（45）がみつかったことから、様々な焼成法に対応できる窯である。本焼窯は2度以上の火入れが行われていたこともわかった。加えて、ハマ・土鎮に青磁釉・鉄釉が付着することから、伝世品に残る染付や上絵付け以外の作成も推定できる。（渡辺晴香）

参考文献

(財)大阪市文化財協会　『堂島蔵屋敷跡』　1991
河原正彦　「江戸後期の京焼作家」『世界陶磁全集』6　小学館　1975
関西陶磁史研究会　『近世後期における関西窯業の展開』研究集会資料　2003
関西陶磁史研究会　『軟質施釉と陶器の成立と展開　－国焼と京焼－』研究集会資料　2004
京都府　「京都陶磁器説・京都陶磁器説図」『京焼百年の歩み』附録　1937
新宿区生涯学習財団　『東京都新宿区　水野原遺跡』　2002
高槻市教育委員会　『高槻城三の丸発掘調査概要報告』　1987
中ノ堂一信　「永楽家の代々」『淡交』435　1983
中ノ堂一信　『京都窯芸史』　淡交社　1984
野村文華財団　『仁阿弥道八・永楽保全』　1989
林屋辰三郎　「歴史の中の京焼」『世界陶磁全集』6　小学館　1975
船木佳代子　「大阪・奈良のやきもの」『日本やきもの集成』7　平凡社　1981

c．瓦等（図13～19・図版五～八）

瓦は中世から安土・桃山時代のものも少量出土したが大半は江戸時代に属する。軒丸瓦35点、軒平瓦24点、道具瓦10点以外は丸瓦、平瓦等の中で特徴のあるもの、完形に近いものだけを持ち帰った。持ち帰った瓦の量はコンテナ約20箱分にのぼる。それ以外の瓦破片は現地に埋め戻した。取り上げた瓦の中で図化し本報告に掲載したのは軒平瓦21点、軒丸瓦16点、道具瓦７点、丸瓦８点、平瓦３点の計55点である。市報告書のⅠ期～Ⅵ期の瓦の時期分類に従う。その分類によるとⅠ期は中世末の入江氏在城期から安土・桃山時代の天正13年（1585）高山右近が明石へ転封されるまで、Ⅱ期は天正13年の豊臣秀吉直轄期から元和４年（1618）土岐定義による大改修まで、Ⅲ期は元和年間1618年から寛永年間中ごろ（1630年代）まで、Ⅳ期は寛永年間から正保年間（1648）まで、Ⅴ期は17世紀後半から18世紀代、Ⅵ期はⅤ期以降の江戸時代に属すると考えられる。

今回の発掘調査でもⅠ期～Ⅵ期まで全時期の瓦破片が出土した。Ⅲ期以降の瓦に関しては市報告書掲載のものと同じで特別のものは出土していない。Ⅰ期、Ⅱ期に属すると推定できる瓦の中で市報告書中に図等が発表されていないと判断されるものが今回の発掘調査で数点出土しているので、それらについてのみ若干記述しておく。軒平瓦（62）、（63）はⅠ期に属し、（64）はⅡ期に属する。丸瓦（107）はⅠ期に属する。その中で特に軒平瓦（64）は蔦の葉（中村博司氏教示）３葉を中心飾りとし脇飾りとしてレリーフ状の唐草が配されており、文様は力強く瓦当幅は厚く、6.2cmを測る。瓦当凸部には金箔が僅かに残存する。堀の堆積・埋没のⅣ期に属する斜面堆積土層から出土した。この金箔押軒平瓦と同一層から出土した瓦は（63）、（83）、（85）、（87）、（90）、（93）、（94）、（96）、（98）、（100）～（102）、（104）、（108）～（114）、（116）であり総計22点にのぼる。軒丸瓦（86）は同一期のピート層から出土した。今回出土軒丸瓦中では最大径であり17.2cmを測る。図化した瓦中、これら23点以外はⅥ期の土層およびその上層から出土したものである。上層出土の瓦の中にも新旧があり、中世的な古い瓦も認められた。

軒平瓦（64）の金箔の残存状態を模式的に２色刷りで図化したのが下記の図13である。赤い部分に金箔が残存している（巻頭図版Ａ参照）。　（泉本）

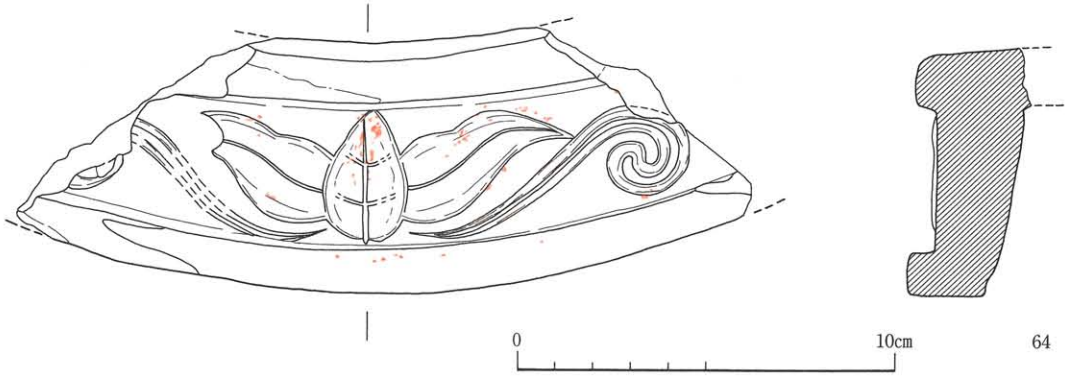



図13　金箔付着模式図

図14　軒平瓦拓影・断面図

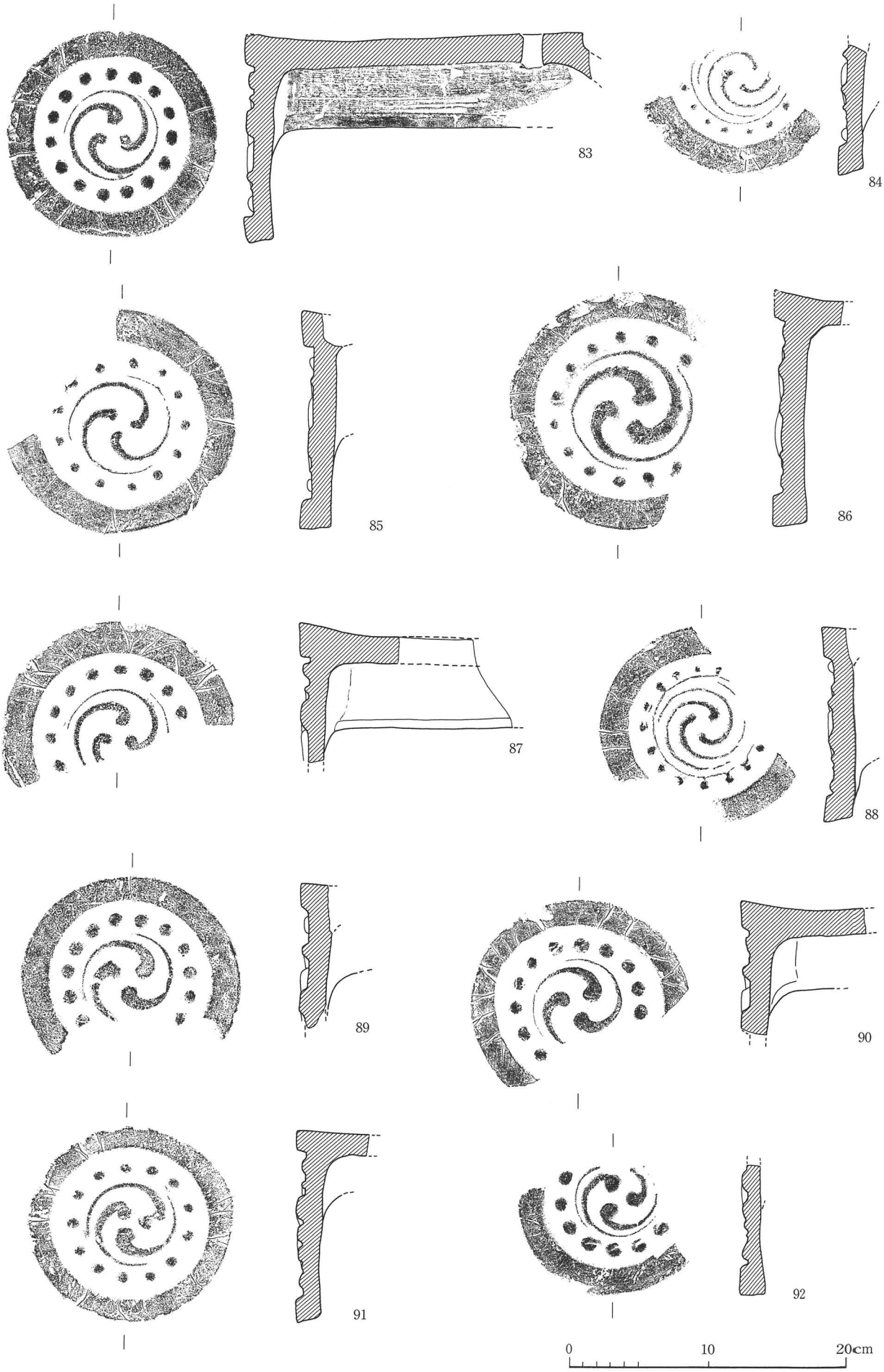



図15　軒丸瓦拓影・断面図

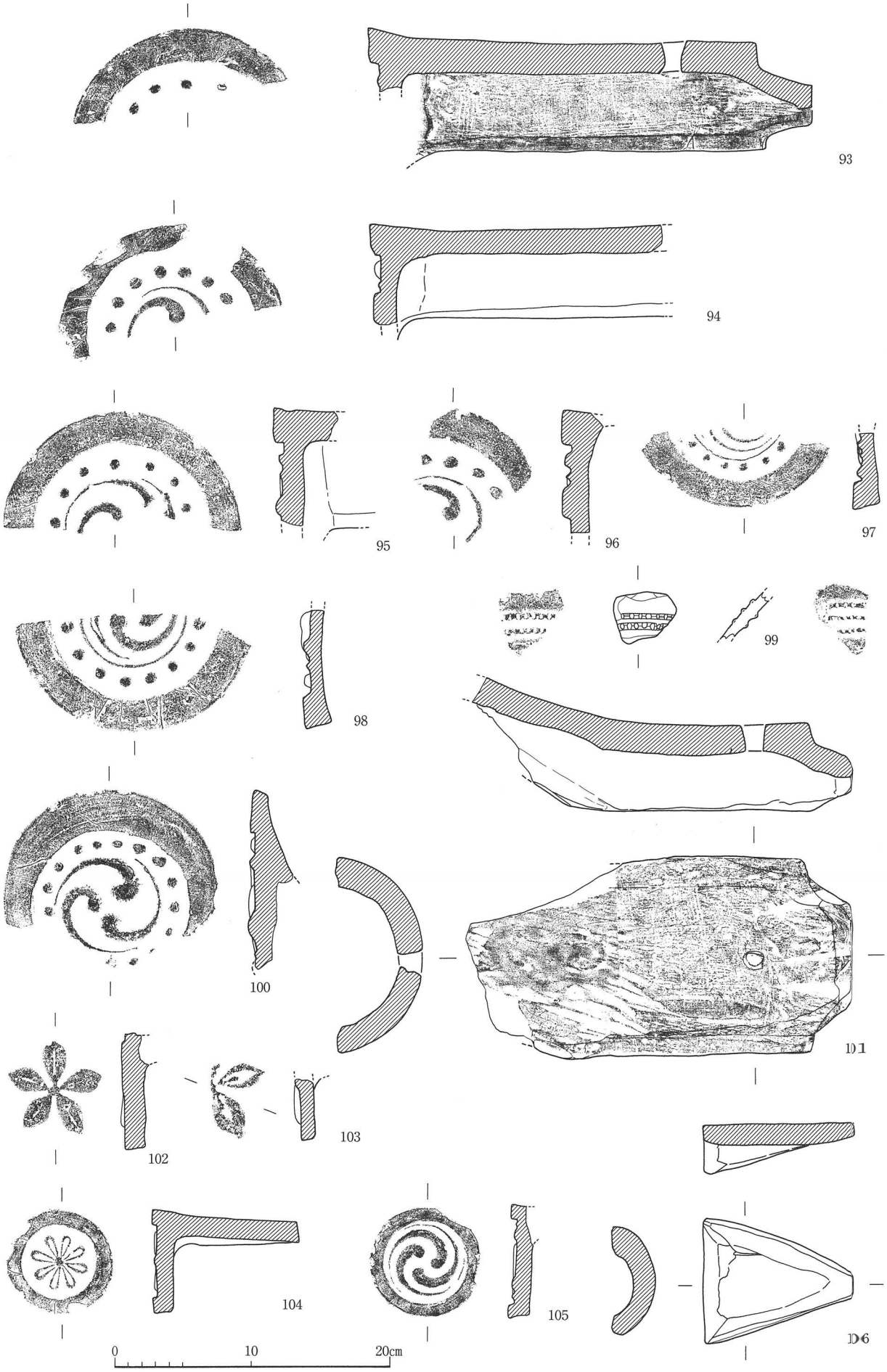



図16　軒丸・道具瓦拓影・断面、弥生土器

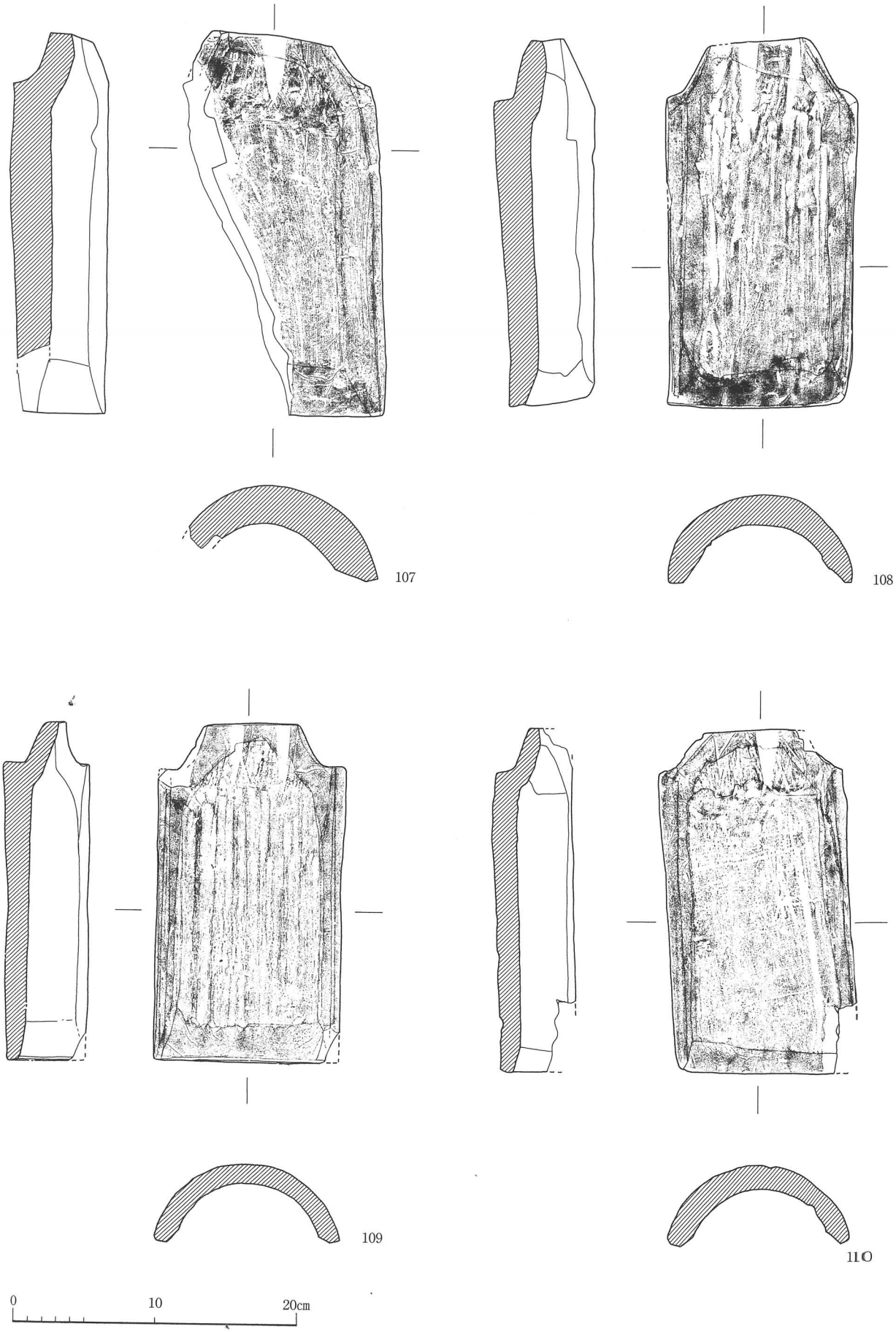



図17　丸瓦拓影・断面図（1）

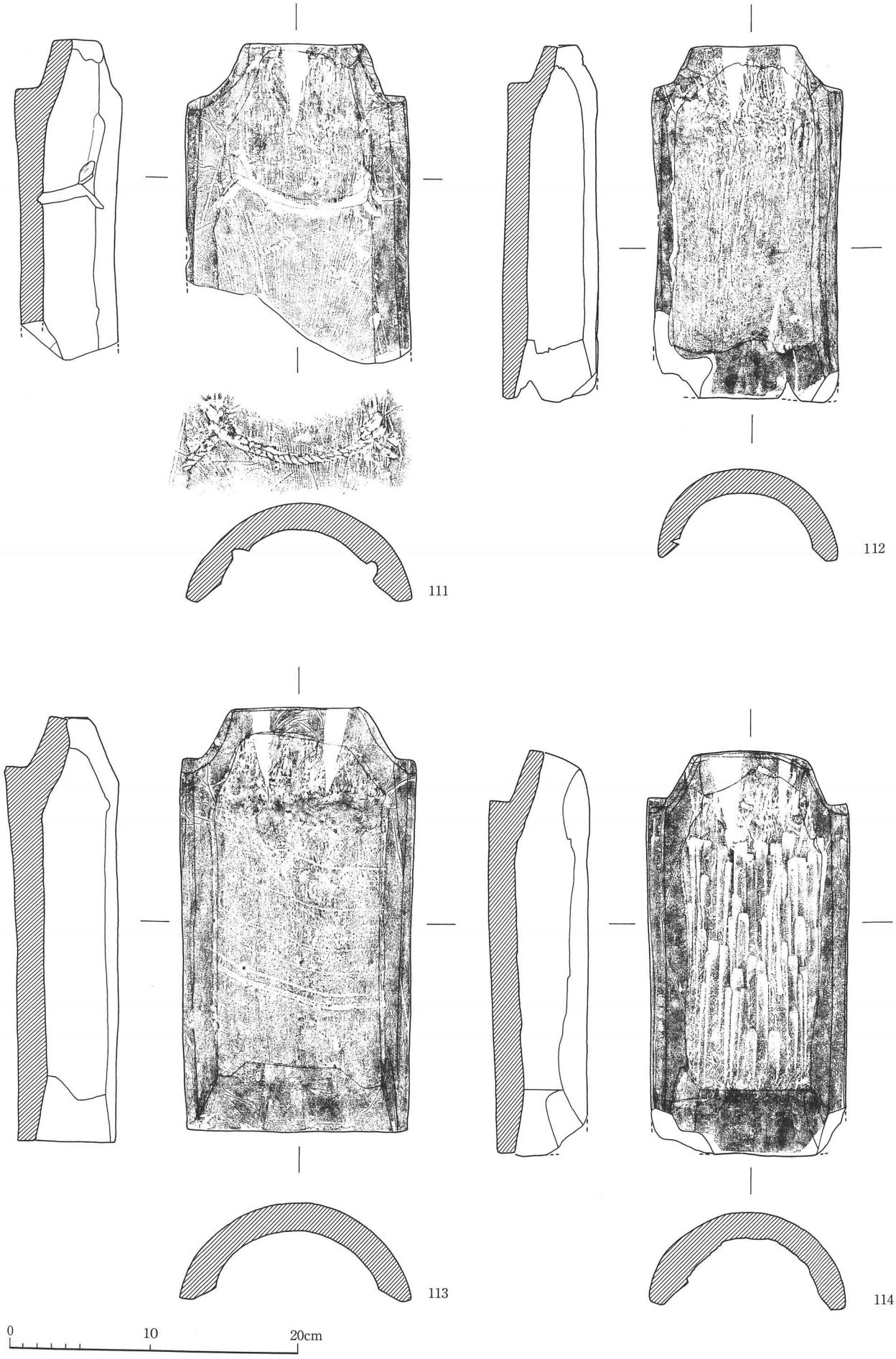



図18　丸瓦拓影・断面図（２）

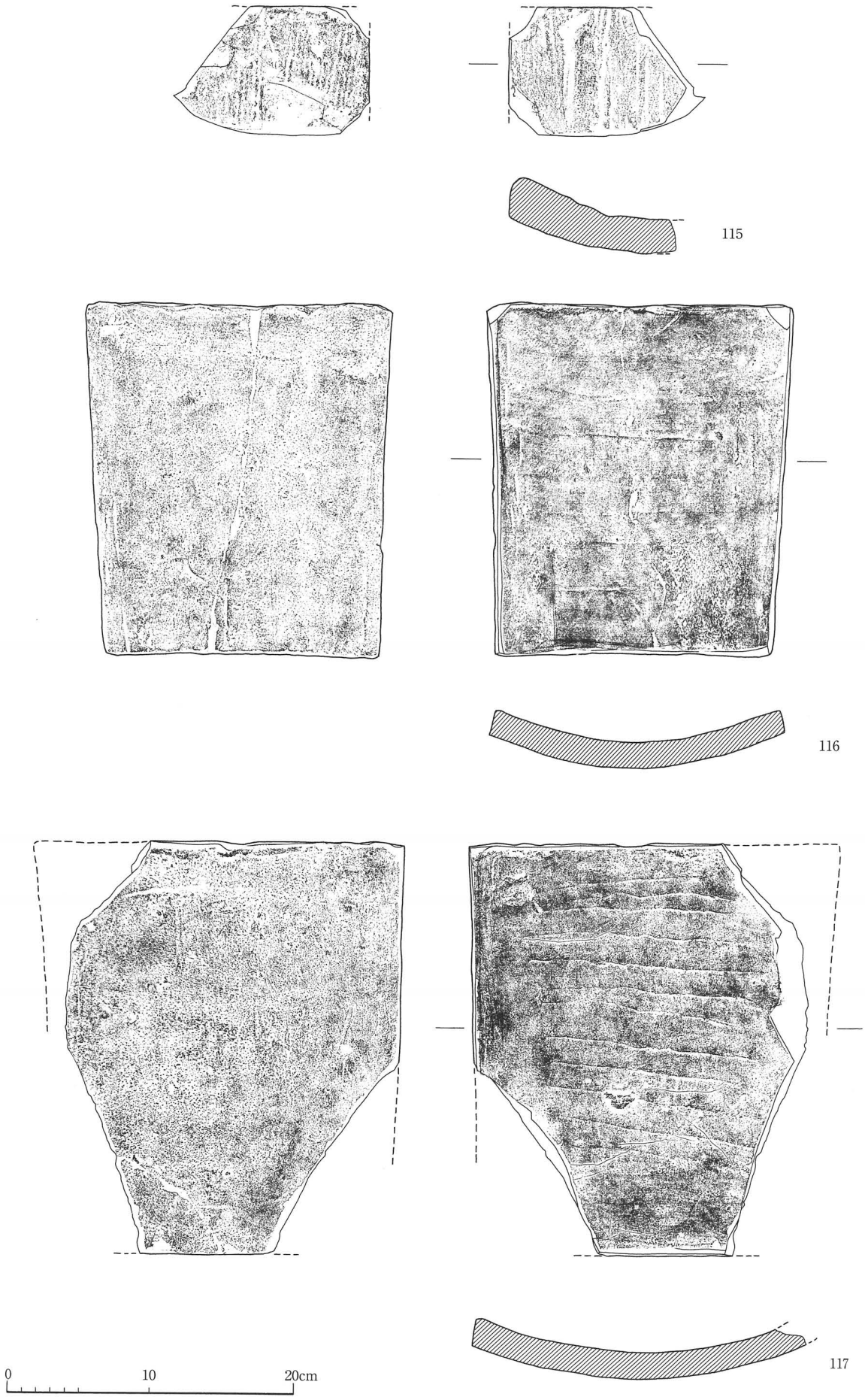



図19　平瓦拓影・断面図

## 第４章　まとめにかえて

### ａ．本丸の堀について

高槻城本丸跡の今回の発掘調査地点は堀跡であることが確認された。その結果、市報告書の江戸時代想定図から比定されていた本丸東側の堀の推定位置（図３）が約20m西側によることが判明した。それは校舎との位置関係からみても妥当と考えられる。18世紀前半に描かれた「町間入高槻絵図」（仏日寺蔵）によれば本丸は東西50間と記されており、換算すれば100m弱の数値であり今回の調査結果はこの絵図の記載に近似してくる。また、高山右近がいた時期の高槻城の構造は明確ではないが森田克行氏は江戸時代元和年間の土岐氏改修時期の城の範囲、面積に近い規模であったととらえている（市報告書）。今回の発掘調査でＩ期とした整地層は右近期に属する主郭の整地に伴うものかもしれない。

### ｂ．金箔押瓦の時期について

高槻城跡での金箔押瓦の出土は今回が初例である。金箔押瓦が出土した同じ層内出土の丸瓦にはコビキＡ手法の瓦がかなり認められる。金箔押瓦は、今日までの100ケ所以上にのぼる高槻市教育委員会の精力的な発掘調査でも発見されていない。今回出土した金箔押瓦は城全体の大改修に使われたものではなく、主殿級建物の立替えに限定して使用されたものかもしれない。秀吉の直轄地となったことから大坂城所用瓦として製作されたものが持ち込まれた可能性も考えられる（森田克行氏教示）。しかし、現在までのところ、大坂城跡では同じ文様のものは出土していないようである。やや似たものとして、京都の聚楽第跡出土の瓦があげられる。高槻城跡出土の金箔押瓦の所属年代は文様構成や金箔手法等からみて豊臣前期にもとめることに異論ないであろう。そこであえて限定するとすれば、直轄期の最初、秀吉の甥であり秀次の実弟でもある羽柴小吉秀勝が在城した時期に秀吉との緊密な関係で使用できたと推定するのが一番可能性が高い（森田克行氏、中村博司氏教示）。そうであるとすれば、その年代は天正13年（1585）閏８月以降となる。秀勝は同年12月には丹波の亀山城（京都府亀岡市内）へ転封され、天正18年には甲府城主となるが、そこでも金箔押瓦を葺いている。日本全国で金箔押瓦の出土が確認されている例は約60で、その約６割は豊臣政権期のものである（中村博司氏教示）。従来、大阪府下での金箔押瓦の出土遺跡は大坂城跡、堺環濠都市遺跡の２遺跡だけであった。どちらも豊臣政権期で大坂城跡では徳川政権期のものも出土している。畿内全体でも秀吉と関連する金箔押瓦出土遺跡は数例しかなく、今回の高槻城跡での出土は貴重な資料となる。（泉本）

### ｃ．永楽保全と高槻焼

保全は江戸時代後期から幕末にかけての京焼の陶工で、木米・道八と並んで江戸後期京焼の三名工である。寛政七年（1795）に京都で生まれ、十二歳頃に西村家十代善五郎の養子となる。文化十四年（1817）に善五郎（了全）が隠居し、十一代目を襲名した。西村家は代々、千家や三井家に仕え、茶道具としての土風呂を作っていた。保全は千家や三井家が所蔵する名陶に触れ、伝統的京焼の岩倉山や宝山へ出向き、修行する。そして、染付や赤絵の写しを製作するようになっ

たのである。

文政六年（1823)、後妻との間に長男和全が生まれる。後妻の家は釉薬などを調達する「絵の具屋」だったという。このような背景で保全の釉薬研究は幅が広がり、辰砂手と呼ばれるつややかに赤く発色する作陶にも没頭した。

文政十年（1827)、紀州徳川藩に父と楽焼の旦入とともに召され、藩邸で贈答用茶陶などの製作を試みる。偕楽園御庭焼と呼ばれている。滞在は二ヶ月あまりであったが、その成果が認められ、紀州藩より「河濱支流」金印・「永楽」銀印を下賜された。この時期には保全の作陶が完成の域に達していたと考えられている。

しかし、天保の改革（1841）による奢侈の禁止は保全の陶磁器にも及んだ。金泥を用い、針彫による金襴手を得意としていた保全の作陶にも規制が加わる。父が没した二年後の弘化元年（1843）頃には和全との折り合いも悪くなり、西村家は傾いたという。この年に隠居するものの、三年後には友人の次男（回全）を養子に迎え、善一郎を名乗る。和全とは対立的になる。嘉永元年には大津膳所で河濱焼を試みるも借財がかさみ、嘉永三年（1850）には江戸へ赴き三井家を頼る。しかし、開窯は果たされず、大津に戻って湖南焼を開窯する。この頃より、永楽保全と名乗っている。

嘉永五年（1852)、高槻藩の永井侯に招かれ、城の東北に高槻焼窯を築く。当初、閏二月に出向く予定を書状に残しているが準備に手間取り、実際の参上は五月六日頃になったようだ。その間、窯場と細工場の仕度に人夫五・六人が遣わされていた。

今回発見された道具類はこのとき使用されたものと考える。ただし、高槻焼も操業は九月頃までで、暮れには大津に戻って作陶していることが酒杯の箱書きから確かめられている。高槻焼は素地も大津から運ばれたようである。現存する高槻焼には「嘉永五年壬子初秋於高槻永楽置造」銘の祥瑞写釣瓶水指・「於高槻保全造」銘の祥瑞写結文香合・先に同銘の呉須赤絵写し魁鉢・「於高槻陶釣軒永楽造」銘の金襴手蛤香合など数点が知られるのみである。「陶釣軒」は鷹司家から拝領された号である。

大津に戻った保全は御浜御殿に新窯を築いて作陶する。嘉永七年（1854）には御所の失火から京都油小路の住居が類焼し、京都市御室に移り住む。作陶に執念を燃やす保全は仁清窯の再興を目指して回全・和全の協力をえるが九月に没する。

研究熱心だった保全は名工の写し物を得意とした。作風は磁器・陶器を問わず幅広い。江戸後期は陶土や釉薬などが商品流通し、作陶技術が整えばどこでも窯を築くことができるようになる。茶陶の本場京都の富裕層を消費地にもつ京焼隆盛の所以でもあり、庶民の陶磁器需要も多様化し、各地の殖産興業として藩窯などが開かれる原因にもなった。高槻城で御庭焼が開窯されたのもこのような背景にあり、富裕層の趣味領域からなる京焼研究が製品を中心に進められている中、今回の窯道具の発見は不透明だった作陶技術を解明する上で重視できる資料と考える。

（西川寿勝）

# 図　　版

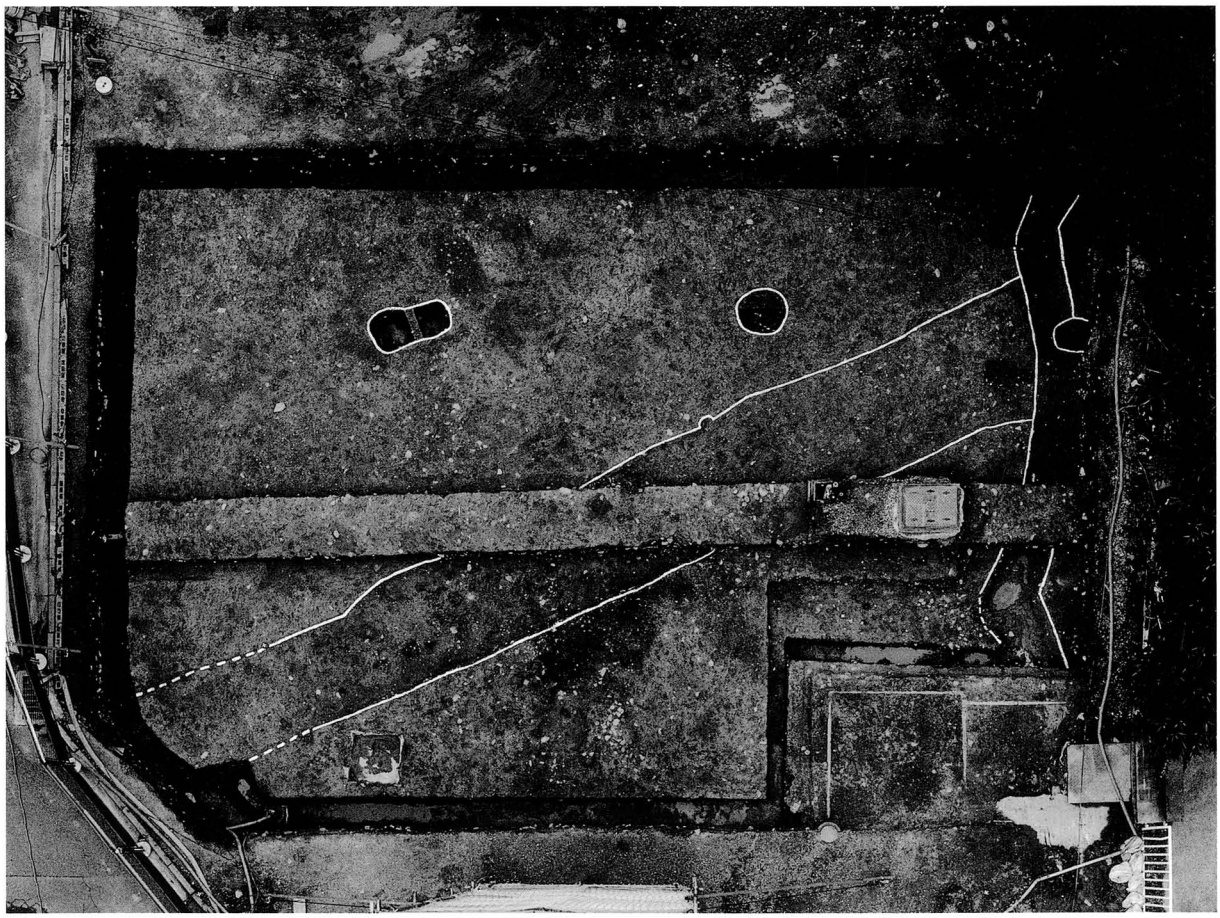
A区第一面（整地層・現代溝等）

図版一

周辺航空写真（1970年代）　　↑高槻城跡

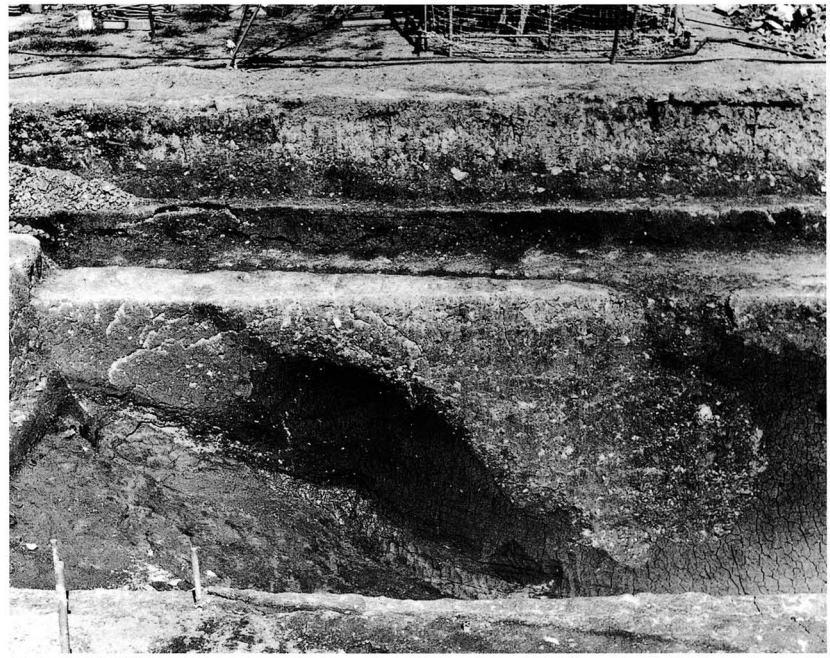
図版二　調査区全景

B区

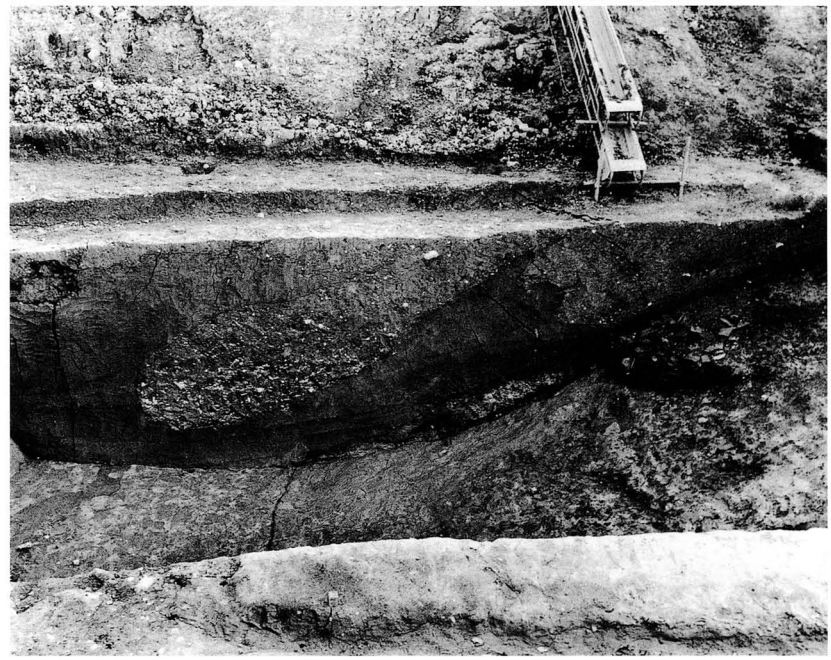


A区

図版三　B区堀断面他

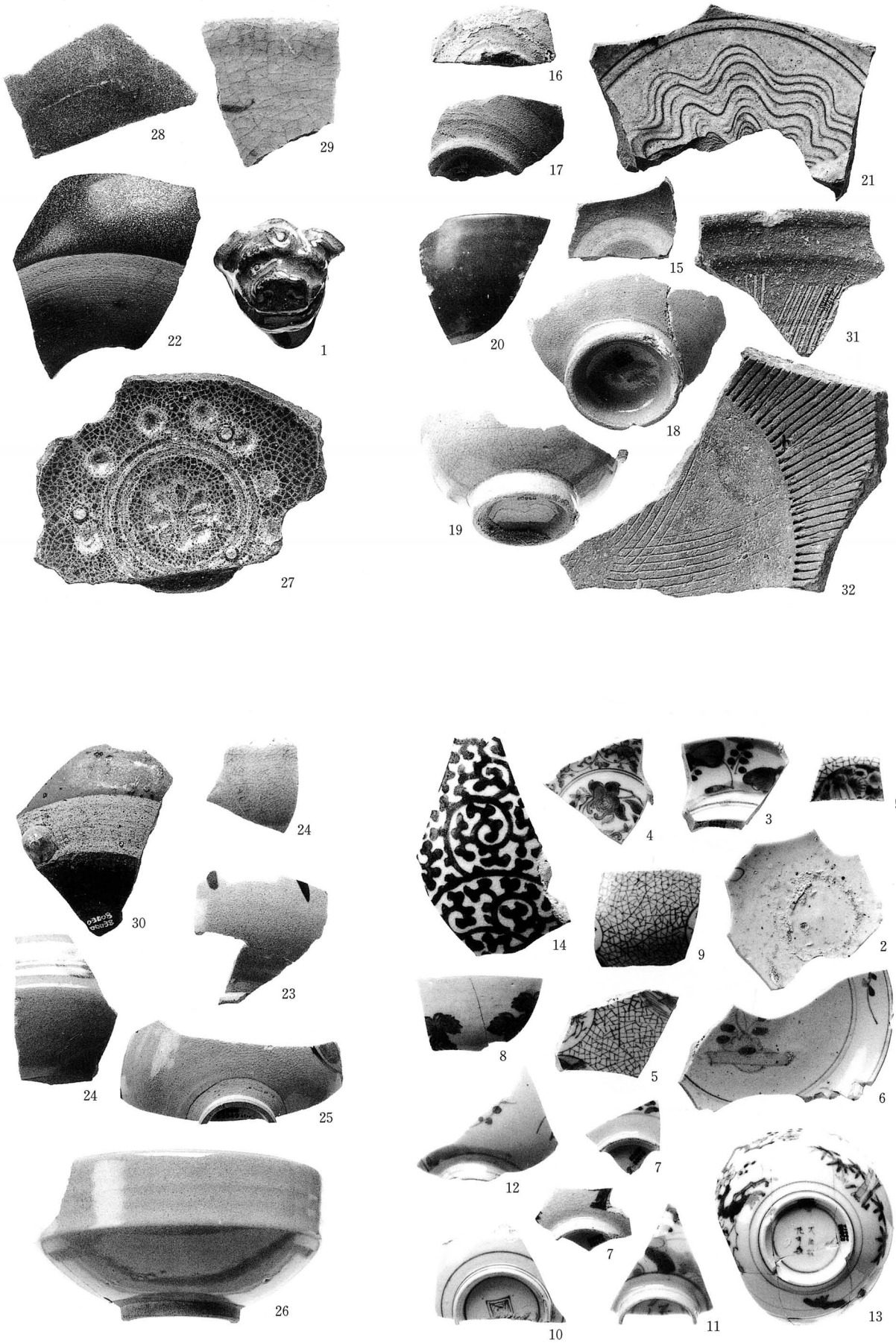


堀北壁



堀南壁

堀西斜面


28
29
16
17
21
22
1
15
20
31
18
19
27
32
30
24
23
24
25
26
14
4
3
5
9
2
8
5
6
12
7
7
10
11
13

出土遺物（近世陶磁器）

62

63

64

65

66

68

69

72

81

82

出土遺物（軒平瓦）

83

85

86

88

90

91

出土遺物（軒丸瓦）

100

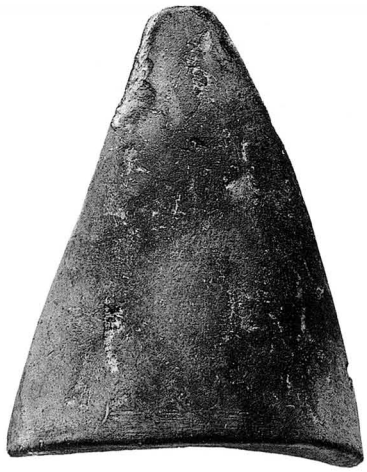
100

102

103

104

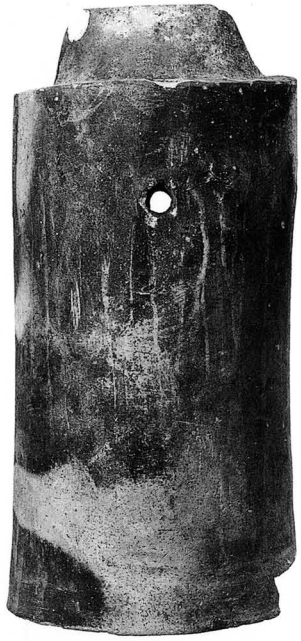
105

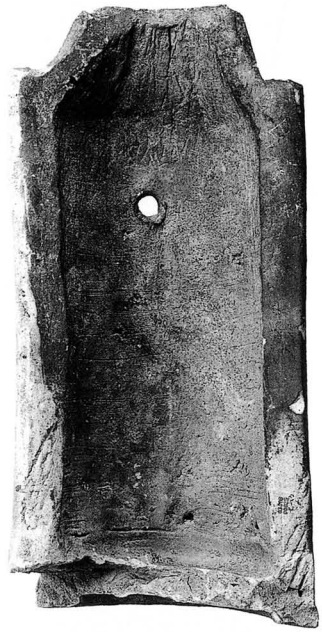


106

106

出土遺物（道具瓦）

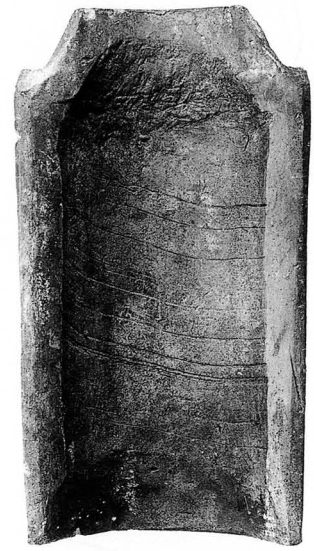




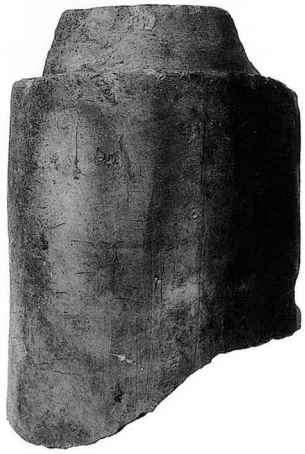
93

112

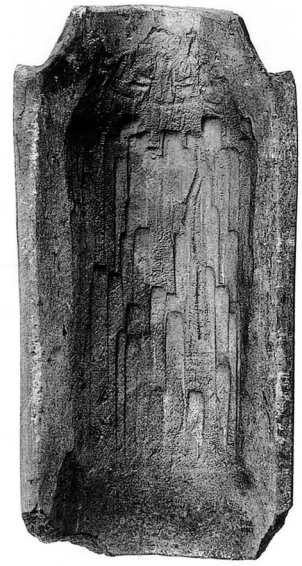
107



113



111



114

出土遺物（丸瓦）

# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | たかつきじょうあと |
| 書名 | 高槻城跡 |
| 副書名 | 大阪府立槻の木高等学校音楽室建設工事に伴う |
| 巻次数 | |
| シリーズ名 | 大阪府埋蔵文化財調査報告 |
| シリーズ番号 | 2003－4 |
| 編集著者名 | 泉本知秀・西川寿勝・渡辺晴香 |
| 編集機関 | 大阪府教育委員会 |
| 所在地 | (〒)540－8571　大阪府大阪市中央区大手前2丁目　TEL 06－6941－0351（代表） |
| 発行年月日 | 2004年3月31日 |

| ふりがな | ふりがな | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 高槻城跡（たかつきじょうあと） | 高槻市城内町（たかつきしじょうないちょう）2－13 | 27207 | 100 | 34°50′24″ | 135°37′28″ | 2003年6月26日～2003年10月14日 | 380㎡ | 大阪府立槻の木高等学校音楽室建設工事 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 高槻城跡 | 城跡 | 安土・桃山～江戸 | 堀跡 | 瓦、陶磁器 | 豊臣期の金箔押瓦 |
| | 生産遺跡 | 江戸時代末期 | | 窯道具（匣鉢・匣蓋・棚板・ハマ・土鎮・円錐土鎮・輪土鎮）<br>窯（内窯・内窯蓋・矢・窯壁） | 嘉永5年（1852）永楽保全の高槻焼窯関連遺物 |

大阪府埋蔵文化財調査報告2003－４

高槻城跡

－大阪府立槻の木高等学校音楽室建設に伴う－

発　行　　大阪府教育委員会
〒540－8571
大阪市中央区大手前２丁目
TEL　06－6941－0351
発行日　　2004年３月31日
印　刷　　株式会社　中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南２丁目６番８号
TEL　06－6976－8761